西藩野史

六

和書門
類 一五二六〇
號 一三六
函 一一
架 八
冊

内閣文庫
和書
類 一五二六〇
號 一三六
函 一一
架 八
冊

内閣文庫
番號 和 15260
冊數 8 (6)
函號 151 134

国立公文書館
National Archives of Japan

西藩野史巻之十二

義弘公

貴久公の次子 長い 義久公 初め義久公小四郎 天文四年 七月七日 世人薩州伊作よりする 初又四郎後兵庫頭忠平と称す

将軍義昭の諱字を賜ひ 天正十四年 八月十七日 義珍と改め又義弘と

称す 天正十五年 八月 義久公嗣子なき故小中尉 按に義久公三女りり薩摩守義虎の

乃ち人なり 嗣て十七世の太守を任ず 室次八守右兵尉彰久の室次八 家久公

天正十九年辛卯 是より前 義久公の傳に載せ

太閤の秀吉 按に太閤と云ふ関白の父と云ふ 十二月廿八日 去年相別

横ま秀次に関白と濫り故に云ふ

町田久成獻納之章
文政年文庫

小田原と称し海内一帰して後又大明国を侵さんとす

謀る　桜に秀吉大明を侵し其説多し一云自側微に起り既に海内を兵吞し自為て伝説の為に中国を伐り小人洛阿を惑す其比伝説に数々告て曰我中国を平定せんと数々降参し海内統せい我一族を率て大明に入り是を取て君と其国の主とせん掌握の間に在り伝数大に説く秀吉感悦九月に至て天を秀吉悲哀して狂るが如し背脊に灸して大明を取んと想像して兵を揚く一云秀吉性淵達敵を滅し土地を得ると云ひ其来歴左の如し数に歌降を以て挙兵し去年小田原を伐て関八州を取花川家と朝鮮故に背脊微賤の事と謀るの士朝と交を結ぶ故に大明を取て朝せんと欲す云

書を朝鮮国に贈て通を絶つ

百朝鮮王李昭　按に朝鮮国完の河戊辰年神人ありて檀君と号し民家居産業を教へ国を朝鮮と號し平壌に都し檀氏国と称す千四十八年商武帝乙未年に当周武王李子と爰に封し八年世を経て箕準二十年漢惠帝の時燕人衛満侵奪し三世右渠に至て漢武帝元封三年武帝右渠を殺し朝鮮の相路人韓の相陰尼雞の相参将軍峡右渠を殺す武帝朝鮮を分て三人を封し参満清候陰と荻苴峡を平別候路人を嚴と涅陽侯とし朝鮮の号絶し漢宣帝五鳳元年

居西干姓朴　立て韓に至ること号朴苴金の二姓相継て王たること十六世を経て金氏を立て新羅に王たり三韓大に乱る高麗大祖新羅を伐て三韓を一統して三十二世

昭王十八年大唐李成桂簒立て王たること

宇明の慶武二十八年也同年三年倭寇朝鮮

怨を以て秀吉怨て也朝鮮と絶

壹爵して十二方に以貴日守是故吾促大兵将入大明而使一叙霸四方別之天唯是之願耳若然則必以貴国為前鋒也其必勿遺失乎出軍于大明之時弥與貴国結交隣之好而已

依之関西の牧伯を城と肥前国名護屋浦

小築しむ令して曰城成しかば衆に被て軍を朝鮮

に發し洪将の如き大坂に在て軍を帰さん

能伯云名護屋に在て経営のるに其方を国に帰

十二月倭鹿児島を出て朝鮮に渡り起居不安

及び義弘公代て名護屋より帰国の時候と経営の
切と終る

文禄元年壬辰

秀吉公大兵を挙て朝鮮と戰川神 義弘公名
護屋に在り経営に與る帰る 傳云名護屋を出て牛浦より船を発し肥後
國長浜に到り薩州を経て大口より栗野に入る

二月 二十日 久保公兵を率て渡海栗野と戰 傳云 義弘公朝鮮軍の為
飯朝の明年鹿児島稲荷
神前蒲流馬を射る 也射る十六騎乃ち先に神に祈る
蒲流馬を射られんことを以て後今に至て毎年如此

三月 二十八日 名護屋に出る 傳云栗野発軍の日栗野の士勇と率し歌謡
年始して芝を分て今に至て毎年七月望如此

くくなる人秀吉刻

四月十日 大兵名護屋を發して義弘公久保公薩渡日向
の兵 校に征韓録大閤記 等兵二万人と と所し 渡海して名護屋陣を發し
龍伯公一句を製して賀す 傳云龍伯公八月神病病平癒して
半出野に帰て鮮より龍面に到る風を
待て名護屋に到る

かくそちの花のくもりを屋して帰国せ

横山安兵衛吉久入道玄佐朝鮮武勇を著す入道
拙夜 日新筆四朝に歴仕て攻城野戰一を名誉公
と所さそこと立るかくしてや類齡衰朽従て朝鮮より
帰りて慨くして懐慨して止面を歌と賦して志と

玄徳

杜甫

為名乃去ぬ　持ち年の力を強者れ

たちさなや　唐士と　異しきも　青なる者

私云此二首と吟ずるに八玉盞を叩くの意なり二喝二嘆人をして凛然たらしむ蓋書王敦傳云王敦酒後魏武帝の樂府歌を誦して

老驥伏櫪志在千里烈士暮年壮心不已意と

以て唾壺を擊て節と為し壺邊を缺くに至る

惟新云も亦一首と賦て

唐士や大和とかなて心乃　西ふてを添さとはまる

或云此歌前薩州

とおもふの所歌

長日さや　海國風なかなる　海と半八里程　吹風と　清て　對

馬國　鰐浦小波　此間半八里程　五月　三日　朝鮮國　釜山浦に

入る　此間六十八里程　七月　七日　小西　摂津守　行長　宗　對馬守　義智　有

馬　修理大夫　正純　大村　新八郎　松浦　利　法印

鎮信　勢　出　先　到　て　釜山浦　東萊の二城を落る

侍云行長等釜山浦に船を繋くの時疾風に船を出し對馬に到る諸將皆

船を出さんとせしに風既に逆ふ海に對馬に到るの日行長既に釜山浦に至て釜山浦の

城を陷る行長城に入り小民を捕へ七月廿五日神速に兵を詐て是を襲ひ明る朝鮮王李昭聞て震ひ恐れ義州に走る故釜山浦

より都の間巡別に守兵なかりしかく行長行軍

釜山浦に到ると聞く　又進て巡別を陷る

六月　六日　將卷く巡別の廣野より金海に　加藤清正小西行長

合て二路より搦手と〳〵洪軍後て出城より入る汗馬先入る國豆道て既に城と経経騎と駆く先と進ふ清忠と亦路とくして出城洪將哥波〳〵て城〳〵と乗て先と守る〳〵（梅北石田源次郎ハ薩摩国住人豊臣大谷刑部少輔吉隆ニ秀吉の命と文禄ニ洪軍と合戦先と朝鮮の二奉行と之久保之を薩て城より入る又永平に接す）永平ハ都と之を北に行る義弘乃又七師忠豊と玄川城と守り（永平の東に行る其兵五百人）久保之乃軽卒多て秋と刈る朝鮮の兵数十人急に襲ひ来る卒二人と殺す久保之先と行る單騎すして出ふ出一里乃釈二人と殺る刈と久保之乃久春見洪將次郎出て首級を

得て帰る

十二月義弘之金化城と守る神弘部の為牧司晋州（都乃北）ハ在り大軍と卒ひ敗と繋んとす故に都の洪將其兵を引て城と後撤す兵に沿て長晋に敗る左信守之親麻田（都乃北）ハ在り戸田民部少輔廣丹（都の南）ハ在り或之忠豊此時春川に接る金化（都の東一里半）ハ咸鏡道の東廣尚之道の中に在り三面敵と接く守る朝鮮洪將兵と戦ふ義弘之とそれと〳〵結果院幸侃（戸田軍記幸侃朝鮮に死ス）ハ陣中に在て逆と保ち之非也朝鮮陣中洪侯の書簡見候乃

清て田洪將保ちかくさの地なるとい

兵を率ゐて肯さず義興亦食を不ふして辭して
往きして可也　　之れいなり兵に憤りて義も
亦留なりさも砦をんいちの為めに義弘兵に使ひ
十二月今帆を枕を北城海に高山の敵常に義に
登て　久保を見て二百を率ゐ山に登る敵矢石
交て兵を防く　乙の軍兵を侵ゐ大に乱て敵を
斃を歇て敗走を逃て首を拾ひ級を獲て帰る
久保乙の兵等の首を斬て帰る切に者ひ俗を悪く首
を山中樹木の枝に樹て旅館大乱館の備りを共に結て帰る

義弘乙兵を率ゐ敗を乱将を大に称誉を兵に敵再び
城を頼ゐるなし　久保乙野に出奮を枕ち馬を走て虎
を追に逃ゐ士卒を以て兵を囲ゐ乱館を乱て兵に向ふ
虎奮起て出んとす大に乱前後其害わるんるを
乙の前に逃ゐ乱館を撲ゐ肩に載て殺ゐ　乙兵に撲ひ
脱を殺んとゐるれを虎走ゐ疾風の如く　久保乙に向ふ
大田吉房忠保横さに走て大に呼ゐる虎顧ゐ
乙を殺て虎の頭を撲川侍に安玉と云　虎躍ゐ忠保走ゐて
一刀斬又口を突て咽を貫ゐ如兵虎死に時に生を乱館

と称して虎と号し川沿て悉く船を設け備へ自殺して義弘公の久保公の拳動無紀綱なりとて連失ひ給ふ故
悉く敗て日暮虎渡河を將乃然るに将乃然るを不田二城を示
攻む（薩摩文と所悉豊平乃）城乃経営未全し悉豊敗を　義弘公に
敗む却て軍を発し先を敗て敵戦をして遁る　乙を示
全然帰り敵後を以て春川と図し悉豊激怒なり
と云へ共春川出陣して先を敗る敵遂て遁去る
悉豊斬り乃首を捨級左の耳を切て名護屋に献る秀

を書を賜て切と賞す
文禄二年癸巳
先是朝鮮王李昭義州に出て大に倭兵と為を接と大明
（明の十二年神宗萬暦二十一年）に乞て止まる　却先兵を義し游擊史儒副総
兵祖承訓略縁に（大明朝鮮の境）を渡て先を敗る（白三明紀云倭且暮渡略則盤且中示遼接之）
使証相錯なり　行長逆撃て先を敗る史儒是に於て祖承訓僅に身
を免る故に平壤を守て朝鮮を敗る行長利乃
そして退て牧丹峰に寄別を設る蒼山浦と称乃
と云へ共実は未（昨に都に在り）　後て日和将と遣て決戦に敗

在に明無動り牧可起る事利をとられしあるに弓く都城ふ
も一番滅して事と行ひ書ともて決勝と都に弓く吐に
加藤清正甲山都の北隅尾良哈 其真契丹の境なり よりて路嘉遠くして敵
其弓に海川を行ふ兵と憂ひ 義弘に告て曰彼くい
兵と清正に告ると応兵と称んを数根仲高所んと
兵と 又兵と雷也として 徽波掃部高と補所を
高流と武百人と為て十隊を経て甲山に海を清正大に
二十万勝利と賞賜に二王命と結て 乙に及命に 乙兵を
敗に苦く高所と赤其勇壮と感て 立月五清正都に飯ろ 明将李如松

大軍敗に入くんに敗に小早川左衛門隆景立花左近
将監宗茂毛利大蔵大輔吉康久留米侍従秀包小梅
帰鎮 都の西 に在て兵と防ぐ宗茂 義弘に勧金の文
ひろ所に有馬法印晴信 法に丹波と云墓南林寺の居にひろ五代の孫
家久と
羅せ兵と率ひ事の時和歌
六首と詠して兵と慰心席ひろ云
乃馬丹波義なるう郡うひつ
世よろ〳〵ゆをひの方に乃ど一箭ひして抽ひ川ひろ者れ八車 表紙波其
方ひ世いる吉嘉と歌の上ひて六首と作る孫中四ぬまと稱ひろ
と波ひと社なり事〳〵

事 去て海ろ矣下ひの一をしたりこの数をふ川ひろ去れ

君 驀ひの烟と海ひ者ひ乃ひ事ひと去ひる高海ひ都

然 怪の過ぎて誤のよりて火をむかうん法乃藤をひてけん
致 教ふるを花の梢の吹る嵐ふに絶ぬ怪孫なるか
哀 こゝ者の下ゝ[illegible]ゝ義ふ[illegible]の中[illegible]
身 [illegible]に[illegible]て絶ぬ[illegible]
小姫幸[illegible]人と房宗義と接ふ宗義の[illegible]
敵ゝて保ゝこゝの地くゝ書病ゝ助て[illegible]
主人を物ゝ文ゝ繊と池て義弘君の恩と謝ゝん
重純石肯日義主命と清く[illegible]
とゝんゝく[illegible]ゝ帰り反命の辞ゝ[illegible]宗義教諭

反覆ゝれゝ重純国ゝ拒て德川宗義止ゝと得て
[illegible]と麾下ゝ立ゝ如去国城川ゝ渡ゝ 二月二十七日 降家ホ
逆賊て利ゝ宗義元廉其接ゝ[illegible]川 如松敬[illegible]
重純蕃軍と揮ゝて宗義と物ゝ宗義乃切と
樹川故ゝ秀吉感悦ゝ宗義と共ゝ宗義賀
ゝ舟ゝ重純と帰ゝ義弘ゝ吉沙ホ乃
令に従ゝ龍仁 竜仁京愛道の内都ゝ去ゝ[illegible] ゝ接ゝ敵船ゝ攻ゝ接ゝ
[illegible]ゝ叫ゝ明人沈惟敬和ゝ小西行長に対ゝ行長
秀吉に告ゝ秀吉ゝ[illegible]ゝ和軍ゝ[illegible]

去り帰軍して国城に[illegible]さ勢を[illegible]る帰る義弘公
[illegible]毛利と波と吉成と共に征軍の選[illegible]厳して[illegible]
山浦に[illegible]て久保と父子国後倭人書島と云 に[illegible]
太郎忠永 初忠度薩摩守義虎 [illegible]国光成の[illegible]として極[illegible]
久地に去り 忠永に居出水しうら[illegible]所[illegible]に[illegible]所に 秀吉征西の日又を[illegible]して
[illegible]に[illegible]秀吉[illegible]と賞し 出水 阿久根長島野 田高尾野 出水 高城 高城 水引 二
郡[illegible]方石に封して義弘公に[illegible]に勢[illegible]を命と
[illegible]と[illegible]西と称して命に従[illegible]秀吉[illegible]地[illegible]書と
義弘に賜て其罪を赦し 按に[illegible]を収め 此時出水高城二郡 秀吉の直隷となる 死一番と

死して小西行長に拘[illegible]む 按に傳云今年八月二十七日忠度朝鮮国加徳島に於て四十歳にして卒し[illegible]と云ふ八改易の後[illegible]
越前代官[illegible]の地車と云ふ既に[illegible]
未達[illegible]書
中此説有[illegible]

出水郡を[illegible]て其子薩摩守国久と云 忠国云の外[illegible]其子薩摩守成久 日新云史人北
父也其子三郎太郎忠長加世田に住して太永五年卒し其子八郎左衛門実久其子
薩摩守 義虎 義久公長女を高城に嫁す義虎の妻子郎忠度也他腹生し[illegible]三郎
二郎忠隆と云歳久の養子[illegible]と備前忠清と云母 義久公の女忠永改易し後
忠清肥後に住し一女一男を生し後に家久公の妾となる 光久公の生母なり 寛永二
年七月二日卒し心慈忠慶安大姉是なり一男八新納近江久元の養子為り又助忠影と
称し後近江と改し故に忠清の後と絶て 吉貴公の時に至り新納市正久珍忠影の次男孫
郎久基して忠清の嗣なりも太郎二郎と改め薩州家二男の称しし其子仲久道 吉貴公云
致仕の後若死中なり其子今の伴久好也や忠清の弟と孫市郎忠宗と云 治欲有る母八忠清に
同し忠永抱らるの後於平潟別国分郷上井に住し慶安八年十月十二日卒し病の亡なりし
及て 義久公を臨問し時に忠清肥後に在り忠宗秋勝下に在り於平嘆して四薩州家断絶と
て幸なり[illegible]公諾し給ふ 右命の為に滅なりと以て陽に家を興す

率て悍り薩州家の等と降し忠栄をして家を興さしむ其子氏弘女輔久基子孫二市久弘其子
氏弘大浦久雄其子伊織久近其子矢柄久純　宗信云の老中なり其子今の矢柄久亮是也○用久の次
男を下野守延久と云子孫大田金左衛門　作義弘慶長五年の陣に出る○國久の次男大野駿河守忠徳と云永禄八
年加世田の地頭なり其子駿河守忠悟其子忠元其子忠宗共に駿河守と称し忠宗　義久死命に
逆て文禄元年河内堂尾に沸せらる神忠宗の一女なり男子なし故に横山兵部太輔忠助の二男
七郎久高を養て女に妻せ権兵衛と改む忠宗伏誅の時久高京寺院に遁せらる　久隆云是
故に横山氏朝鮮国に随ふ於是忠宗の女婿姉となり薩州と出て京都に登り住せらるゆえ
年又飯て河内に居る　二云慶安十年島津豊後守忠朝の季子女義弘云の孫　質うて江戸に登る
義弘云養女　時に忠宗が女前髪にして妙春と云京師に住して其俗と云を以忠朝の女に後て江戸
今年十三　きくと云妙春婢にして云有源の寡婦常に悲嘆を事とするのこと仕と敬せず　義弘云若命に従ひ
我養女に忠宗の女と云ふ源と云ん妙春命に意に高ならず切に敬く養女法に薩州鹿川城主
松平隼次を定行に嫁に定義をせるの後妙春脈をひて国に飯る於是禄二百石を賜り三原左
衛門佐重儀を以昌として大野氏を嗣さ内記久行と称し五代の孫大野権太夫久富是也○国久
の二男を伊敷守秀久と称し薩州吉利と称し氏を用て氏とし五代下総忠海に至て絶して別
姓見を賜ふ殿下征西の日収せらる十世の孫吉利左馬久　是なり○国久の四男を駿河守光
久と称し其子出雲守真久寺山と氏とし光久十代の孫寺山源左馬用長是也○成久の二男を西川
伊勢守真久と称し
寄田に住せる孫なり

先是小西行長与於国藤花浮る

白明通紀小殿下
西花に作る

鏡

の使と称して大明に入て和平成謀を数年と経て猶ほ
そ如是殿下和平を怒ること甚しく朝鮮に決戦
に入て国内釜山浦に至て兵を発し若干交戦
薩州の牧司と称して赤国と称す　按に朝鮮に八道あり京畿
慶尚全羅忠清江原黄海平
平安咸鏡と云是を国にして彩の色を以て八道に名付く京畿道は中央に在り淡黄色にして
江原道は東に在り緑色にして慶尚道は辰巳に在り青色にして全羅道は午未に在り赤色にして
所謂赤国なり忠清道は南に在り浅青色にして黄海道は西に在り黄色にして平安道は
咸鏡道は北に在り白色にして咸鏡道は北に在り黑色にして以名とす
其城治を投ず　按に城分既の條書あり　義弘云一城忠豊八毛利を攻る
志城伊東氏弘太浦高橋九郎　社原二郎と一城惣計十八城　国く
保川に明に決戦を交して和平信あるを故に殿下又
命して国内に薩州を以て牧司と称して赤国に入て

今と待て洪水軍と戦ふ播州より命ず播州ハ朝鮮より
於て宗義智の地とし牧周防守騎兵とする四万人
如去大兵と固城より出でんとす播州と攻ん如去事
賴んことを要し奉行小西行長一城を築き
智勇の将をして兵を守らしめ兵に備へん　義弘公其
櫻より高麗　公浮田秀家より固て辞して同明軍ハ牧
赤ゝ中ゝ洪ゝ水ゝ軍ハ南北より陸道
もゝく頼ゝくゝ我ゝ番州より敵ゝ強ゝ寒ゝ及ゝ血
ぬりて切と樹ん　播州ハ番州隔ちる

乃ち洪水軍を我軍亦大に洪水軍に攻ん故に公家を櫻に充
川壱より當ゝ頼ゝくん切と計ゝ兵ゝ出ゝ
義弘公壱ゝ心ゝ海ゝ陸ゝ洪ゝ水ゝ軍ゝ忽厳下の書
到ゝ其略云浮田秀家卿下一番八幡毛利元清
卿下二万弐千人代ゝ如松より備ゝ中ゝ八万人軍ゝ番
州と攻ゝ　義弘公大ゝ水ゝ洪ゝ水ゝ軍ゝ番州より
命ゝ下ゝ　其ゝ西ゝ国ゝ攻ゝ川牧周防守軍と驚て防
戦ゝ上ゝ陸ゝ軍ゝ城ゝ入ゝ賀ゝ に附ゝ き矢石を渡ゝて進ゝ
加藤清正先ゝ登に進む洪軍陸て攻入ゝ城中震動

して鼎の沸うがごとし浮田秀家の長谷堂牧城
前と浮舟ヶ城長盛を走らしめ進て番別山の麓に陣
前と浮舟ヶ一戦ありて敵を敗り為て死を捨て
敵を敗り為て死を捨て義弘公番別と為て昌原に
移る（昌原に番別と釜山浦の間に在）七月七日或は六月二十八日 時に義弘公番別と為て昌原に
敬恐て釜山浦に来り行長に告て如水の怒を云行長亦怒日汝和を約して
如水猶固城に在り其意如何惟敬恐懼して能く和を深る
七月 久保公薨去 公暴病小羅里廣浦（耶岡浦也）の営中に
逝去（侍云九月六日病を受 日八日の刻に逝去）享年二拾一
桜井久保公を義弘公の中と為る（一云安島伊豆守朝久の家 義弘公怡佐の宅地に住居故なり）

世に行長地獄と称す（一説に九州に帰る天正十年十月二十八歳にして遷化 賀茂宮 不動寺 光林山吉祥院と云真言宗 大乗院 寺号南山と光林法印と云 に安置る神主と成野幼生寺に建り 緒と涼山 生と號 幼生寺の本は亀城山と云 浦宗 柏野宗 に院 の末寺なり 開基の年の年月は詳にせず）

年 癸酉 日別 加久成小せる 美濃国武儀郡 独鈴 秀吉入洛の日日別 清滝郡 郡に射 国家の為に
奴 して 治湯 より 玉 に 成る 厳 に して 国に 帰 り 又
秀吉に従て 相別 小田原 の 軍 に 参 して 勝 鮮
に 勝 て 切 と 結 して 逝 去 文禄 為 田中 三 蔵 の 年
三蔵自殺して 弾 死 に 遺 厳 と 寺 に 帰 て 谷山 皇
遠寺に葬る（廣福寺に在り） 遠 と 一 唯 怒 参 公 と 成 （桜に永谷山皇徳寺貞治六年十一月）

寛創建曹洞宗今八福昌寺の末寺や傳云開山無外禁照
和尚八皇子なり敬に皇子と號て寺号とす

國にすぐれく哀の彩戸とる兎川　龍仰云傳平と傳
して祭る庫あり云

一唯想参る弓馬の及とたくなみ武士のたけさんを
きたして前関に秀吉云異國退治の時下知したまた
かひ軍陣いとゆうきさま大海をうつしの汚かひ唐島
とをふ示ようく文禄二ゑ九月七日壱とをやう船く
りと告云ぐるしたまふ為まとひ仏色ちさまなり
其況一前をとりあまはいく作りたりとも加藤さ

の船ちいやくよ船くるを見の波ふ志川み歌のあ書も
きくくもひ毋しかつ孫と人目の海を思ひ六字寶
号を神ゆ毋六前とけく孫廻毋くきをのるくし
南嶋くを出の船ちを乗とも紙やなくなく指ゆ毋の乗方
云むちちさけ寺このかつまち原乗を西ゆくるく氷毋ん
河あやちたく宗ふ志くもぬ船ちまや妻れくれ神ゆ撫りて
沐みく妻の名称ちなれ孫と加れ枕小加孫の彩汁りして
陀尋ても入くまくゆとこ寺のとさ切く法の源さんく紙
仏筆毋きちくとひちるまてひそふ人のんやなを清ぶまし

後ノ進藤龍山ニ後水尾帝外祖関白大政大臣時嗣淳和久と改む 是ヲ以テ一唯此者ハ
乃逆者ニシテ龍仰老人ノ子孫ニ泳ル泳沱の寒号ハ泳
平小威渡双枝ト言リテ一前ト称ス
泳ニ子ニ云家ノ玉ハ出ル小ニ七ハ紀汗米ノ石ハ油ノ如シ
或云 久保ニ武事ニ練習ス因嗤少武ヲ謀ス一日馬ヲ池ニ牽キ水ヲ起ス遂テ馬
陥リ岩石ニ傷テ逝ス梅ニ正吏賓孫ニ世ス遂妻ノ説信ヲ免シ又或流
云 義久ニ公ノ女ヲ妻ニシテ
其養子ヲ為ス未詳

文禄三年 甲午

秀吉 龍仰ニ小命シ書ヲ福建ニ遣シ[illegible]ム先ヲ
小西行長大明ニ遣ハスの使問蘇龍泳ヲ未帰ラス故ニ

龍仰ニ備文ヲ以テ和解の書ヲ作リ[illegible]ヲ福船ニ
遣ハ福建地方監察院右僉都汗史沖藤回章ヲ
ニ小都ニ無ト伴ハ民ヲ為ンヲ[illegible]ヲ史ニ秀吉ニ置
ヲ置ヲ意亦同シ 龍仰ニ云ハ[illegible]ヲ秀吉ニ献ス
梅ニ手書 龍仰ニ云ハ 九月賊 紀谷山浦辺ニ来ル和寇ス
場ハ今往史館ニ載ス
侵ヲ福島ヲ為ヲ史正則戸田民部ハ梅氏等来ル
幽ヲ[illegible]出テ賊ヲ 義弘ニ伊集院下野入道抱ヲ
命シテ正則ヲ拒ム正則ヲ敗テ賊船ヲ捕ヲ焼ス
撃ヲ[illegible]シテ梅ヲ賊ヲ戸田来島抱ヲ小賊船

迎ひ遣ろ於是賊敗まて遂去於明に又数十艘国
洪小来て義弘公の営を攻撃り大猶奮戦と放て
ゝまを洪軍却て迎んとを公是と制して回賊と進こ
来て家喜疾し恭悠として動く色しに表る
と給ち奇情人と称し一奉して大切と浮ん洪軍
令に従ひ給り日中に至て賊暴り遂去り洋中に
繰しる数日 公乃軍営書くとして祀り記
と見く書を退り十月八日
十月晦日忠恒公勅解より出て国侯の営に入り初

忠恒公国小至て 久保公の逝去を聞り勅解に初て
義弘公を勧んるを殿下に乞ふ 秀吉公聚楽に来て
勅使を〻〻給して洪小を〻〻於是去年十月
聚郡と変〻 川上三河守忠実入道虎伯と称す 十二月十二日 聚別墅に至て疾
疾と病ふ 近衛龍山公為国共を来て是を
今年春に至て漸く和平小屬を 二月十日 聚楽
殿下に渡〻 石田三成に同く勅解小をんるを
乞ふて乞を 秀吉洪密人故に伏見と辞〻 二月二十五日
名護屋に至り順風と給ち十月八日 疾平縫と解さ

傳云十月廿日申の刻壱岐國風本に到る四十日目 火船日を経て 日月 船に
對馬國府中国二十六日 金山浦に寄る
海の賓小入る 傳云 義弘云軍中に古の庶子姓健ぶると撰び走る所と号す
のと怪
れ神や
文禄元年乙未
三月 義弘云問原小猟して虎を得たり先是
殿下虎肉を得て疾を療ずんとす故に 義弘云に
命じて虎を獲ん為に木下大膳太夫吉俊
或云後に石田三成の為に陥れられ殿下怒りて誅せんと
能仙云に命じて誅せむ加世田辻堂に於て誅し首を石濱辰に斬る
浅野弾正少弼長政等と壱岐に遊ぶ十二月廿日の
春書云月遊ん 治まるも

未獲雪山を望み氷雪を設け故小三月八日国源坂
出て問原に獲し明日九日山に入り後日猟をまとも一
獲を其日十日猟山に入り雪小より雪小下く是を
抱む鬼虎三より踊る頭より是を囲む一虎囲を破去る
爲時右馬次以久の長安田次郎左衛門尉 一説に次郎
或八郎左衛門 是を逃る虎
怒て噬んとす安田刀を持て其口を穿く鋒鋒黄く
虎斃死す一虎林間小陸る所を流を桃て是を伺
時に業雨降り来て火焔大に滅ず虎林を出て人を
喝んとす 忠恒云 義弘云に害あらんとす故に

馬を馳て帥と謂んとす　公の命騎上野相模守
接さに白帥を射て振るひ三度び倒
に投石上に乱騰一度び吼て其勢山谷に震ふ相
六七進て刀を斬る虎六七服を嚼む福永助十郎或
久九郎尾を執て松小太郎と相共に抜て数野助
七郎走来て其右の腋を突く帥は立ち虎騰て
打ち後に顧て若痛して又六七肩を嚼て死を六七
日にして死す一虎を囲て破て遁ぬ　義弘公
囲を小帰る十二日　平田の次右馬家を使として虎囲を

殿下に献ず感書を賜ふ　公は賞を賞して四月二十一日の書
宥　義弘公日本に帰る山内藤潤日経歴改正等のる
成る義久公の傳に載る　殿下　義弘公と云ふ　忠恒公と云
国家を守らしめ　忠恒長男忠恒薩摩侯受任業院法次郎忠真公の養子なり　唐津城
出て五月十日　大坂に至る六月九日　聚楽城小倉を殿下に渡す
茶を賜ひ又小袖乃甲を賜て田おして兵を英
戦小倉の教四兵を武庫　長に兵を引き詩歌を記
に似せり　公是を謝して退く　後　公を召て二十九日　射
国の書　私の書中朱下の教に兵を行朱下と称し経歴改正に出て
更に書を帰て後に　義久公は侍従の辞なり　且四

國に帰て皆と休息二日を経て又朝鮮に渡海し
是七月十七日 伏見を辞し八月二十八日 國に帰り 八十月 負松傳云七月中旬辞京 八月 飯城十月去栗野
従長 栗野を去て帰途に赴く 傳云 公儀素と尚ひ奏侍と恐む
慶長元年丙申 十月二十七日 文禄六年に改元
八月明使初て到る 先是大明と和平成て明使
揚方亨沈惟敬朝鮮使黄慎朴弘長等日本
人を率し八月十五日 釜山浦に至る 要衆を為て殿
下に謁し九月二日 汀長清正是に從ふ 朝鮮に往て文
の渉将小西行長等に命して帰朝せしむ 元大に怒り遂に
して船小西行長と解て帰らんとす 和平復破る
殿下之を傳て帰らしむ 是初 義弘
本国薩摩を使して 忠恒に告て曰和平の真偽
未知るべし決戦と期して後営を挙て船に乗る
命し 忠恒是に從ひ未陣営の中に在て中寂也
して動揺せざるなり 元 義弘乃高明に賜を
傳云明使九月二日殿下に渡る明帝書中封爾為日本国王勅之誥命浩乃秀吉大に怒り
義既に日本に至り望外の力を得んや且朝鮮王自来附せ仕其罪極さに那ひ明使を
恐怖して敗
和約に破る

慶長二年丁酉

二月 義弘公後帥と帥ひて軍舞と成り 先是和歌に
破を殿下再び軍と和舞に遷る今年二月とん朝とん
行長法印朝鮮に先きをして正月 軍と成て 義弘公二月
二十一日酉の刻 北城と成し蒲生氏郷 北城を攻落す城内
頻に賊と戰を決軍拒躍して日稲葉佐渡守 秋月
津氏の捷軍と示をなり躍く城二十日小西行長 遂に
を稍を落て近日豊臣秀吉 自ら出馬 諸大名 悉く従ふ 鎧
示て内内と成し川内川とより 北上して久留米 一揆
鎧より移り十八日と迄て 侍云公の私十騎恢搜人 東太郎左衛門 取数十騎 捷
肥前 に到る 横濱平戸 共に肥前の地 と経て 三度国風なれ
四月十九日 到馬に到る 殿下の書と 公に聽て 後軍一
義文に 如 と 加 と云 公 常に 彩網 佛果 寺
藏 庫 按に新網家は代 老浦の二男 敏河守 是久の子 藏守 友義の二男 紙
号守 老浦入道 無陰の子 藏守 伝藏守 康久の二男也 初僧と成て 肥後
國八代 莊嚴寺の住持 なり
義久公の命に出て還俗 後 出に住 と 号して 四 沈 年 佛 藏 國 中 罷
藏 一万の 義軍 出 新 ん と 況 乎 大 の 兵 を 率 ん
と や 殿下 見 と 先 ひ 義 久 公 と 立て 法 四 考
家 小 猶 し 其 後 私 と 成 し 明 々 加 藤 高 忠 恒 公 乃
賞 小 入 れ 侍 云 神 国 決 に 賞 し 義弘公 飯 朝 の 後 家 に
移 る 玉 決 と 云 る 上 里 長 三 里 の 迫 門 なり 七 月 倭 軍 明 の 水

軍と破る神法將既小船朝鮮國に入て西〻小西行長
加藤清正明將揚元六千人南原（南原の内）と陳川を攻
攻んとす紙洲を明乃水軍大船數百艘と國家
の海濱に繫て倭軍の使者を待り倭〻九鬼大隅
守藤堂佐渡守脇坂中務大輔加藤左馬助小西摂津
守等兵庫に又七郎忠豊安骨浦より出し（七月十日）巳と
破るの味方を於巳名兵と率し（七月十五日）巳海
小船乃急に國紙を〻（賊船と）働く樣に文助（忠豊乃長）
に先きりて賊船に乗る矢に面て水中に斃る忠豊續

く家〻に〻を四發に忠助（忠豊乃長）に先ッ乗る忠豊を追ひ乗り
国人大勇兵清忠豊に從ひ法將若しくは家〻新紙
斬と数百水中に踏る者其数を知らず（倭に忠豊法船と為て日本迄る者数の赤大坂）
に在り 神 義弘 忠恒 忠豊の告とより国船に乗り
兵と碁石濱に伏て候り手和海上に國の家を
ゆりて大筒を發し賊船に敵るさ彼城
拳に成ら〻 と切て通る爽曙賊倭軍の寒さと
人急船を逆して襲ひ来る藤堂脇坂加藤忠豊
等逆襲ひ燥兵船拒禁と投げ大筒と發して是と

燒庫帆吉に火移りて極火炎々として忽ち火と成り
沿河の民百六拾戸焼失す 義弘公 忠恒公
と共に勢ひ火と水と進退考者く能はず
走る 義弘公 忠恒公 是を迎ひ撃ひ敵軍敗
備妻殺と走る人城紀伊守書を以て
加と共次 八月十五日 倭軍南東と流る光明の水
軍と共に破て海通路閉塞 沈将南東一部
義弘公 忠恒公加藤 七月二十五日 右河を渡り
に上り 十五日 南東に到る南東の西北に金剛城

陳愚衰大軍と統て 義弘公 忠恒公加藤 明軍に南東に部軍
海に入る人沈将 倭軍 沈将夜 十五日 に奇て流れ
指る 義弘公 忠恒公加藤 明軍に南東に部軍
と分ち是に倭 侍云愚衰是と 沈将夜 十五日 に奇て流れ
事福男 義弘公 揚て西つ流る 侍云三千人を斬る 忠恒公
軍隊 義弘公 是と進撃 迎て城
迎て首を斬る 是に 義弘公 忠恒公 以是と撃 侍云人木標に置る 義弘公 忠恒公
故に是を梅木と云 侍 義弘公 敵人を斬 侍長驅云 忠恒公
今如血氣方に剛 是に快て西文の切と 忠恒公 軍
詩して南東に入る敵既に 忠恒公 軍
る数四洗て父者の命と称して 義弘公 忠恒公 軍

面目なりて父義弘に見えんやと嘆息して生きず
川上宗斎高恵花を赤自前十二級を授ると云
捷書を殿下に献ずる法
將進んで全州を攻んとす〜と謀る陳忠衰大に苦を悔
〜て城を棄て遁る八月下旬 太閤名護屋の軍の報道聞なし
故に諸將奮激〜て國中に令し標榜を新縣し
立て民に劍ひらめかしむ洪道を分て兵を分ち
慶尚道を 義弘乃劍ひらめ洪道法劍ひらめ其畧云一日報道
忙るるこの郷邑に帰り農業を勧む〜帰らんか
家を焼さるを懼れん家作ひる者を要るに至て兵況
沸〜として焼んと人の陳を守ると若を兵を賞とん倭

人漫小人を殺さい書を云義弘は若〜於是民大に怒る倭
軍稲を刈て登山浦竹島固城に帰る按に武備志に朝神宗倭朝鮮の数乃
と論をやめて船に拠て中國の兵を論んとと
陸を天津蓋楽に水兵を設て備を為と云
十月十日 義弘乃海南全羅道内に入り民間の貢税を収む農民
ことを山に匿る於是小牌方五六寸に番人の字を書して
山〜小牌を見と見て〜蓋いなるを来〜蓋兎運
ひ来て敵を殺るの共服を去て忠清道に入る侍云軍と二に分て
忠真以久陽に先隊となる 山原大河 侍云蔚海の寸八七丁に余る
是を渡る洪軍是に従ふ忠清乃を歌のなるなし帰る。

存して河上四六里に至り大なる石橋を渡り金羅道城

巡撫して泗川城 十月廿八日慶尚道の関也明人是を新寨と云傳云先是長宗我部
土佐守伊東祐慶又七郎秋月三郎四郎兄和泉守高
橋主膳正法田伊藤守中川修理亮等麾下の命を受け泗川城を築て義弘公の塀とし
公赤國より義弘公に至て未成故に舊館に入る一月を経て新城成 公此に移り 忠恒公は
本丸に義弘公は二丸に居故故に新寨と云なり 小入る

十二月二十日 敵蜂別小出吉政等 義弘公

忠恒公帥と率し蜂別河を渡り智異山に登て守む
然るも是を見て細作と称して老して組しも敵見て
怪れ多日吉辛数人を得て斬る敵既に赤國に
遁去て於是帥に宮を築さ幸山所を築

耐久兼是を守る 二江泗川より帰る永春晋州 嘗て賢
故館 明人倭寨と云新寨 を存る所
と云なり一里半 之城と称し永春と川上佛古馬耐
泗川守忠恒三男也 晋州と東法馬耐重庸 法名中古と称し
子孫川上佛古馬 家久の老中に任じ
左馬耐重庸の父なり
其高麗原次郎と称す 蓑輪治右馬助久の活
川上六郎左衛忠實 傳云忠實父と出羽忠光と称し川上筑前守忠俊
の子也命を受て右馬助忠將の法名なり也に部長
となり世々家老に任じ忠俊は其先川上家
三代上野介家久の三男因幡守忠林に出川
則四入道因幡の子也
子孫相模守文光也 猪同兵衛助 坂倉玄蕃助
蓑の羽織長さ三寸 傳云新寨は三面海に接し一面陸に続く前に望洋永春
見陽より左右に金海固城を存り高橋主膳正銃柴上野
攻是を守り東路に兵粮を
積て無双の要害也

考安三年成成

正月元日 海津忠豊等元陽明兵ヲ率テ蒲生氏郷清正

蒲山慶尚道内ニ在リ明軍攻ル急カラズ小西行長

毛利秀元黒田長政筑前秀秋鍋島直茂等ヲ

救フ 義弘ニ垣見和泉守ヲ軍中ノ検使ヲ小西行長ト

蒲山ヲ救ムヲ垣見石肖ヲ泗川ヲ抵要ノ

地ニ置テ守ル石虞ノ愛ヲ以テ小西ヲ助ケ遣ハシ

ニ出テ戦ヒテ出ル霜根仲之丞

ニ軍卒百人ヲ率ヒ島津忠豊泗川ニ出ム二十

然川ハ南ノ地ヲ出テ蒲山ヲ救ムト云ヒ忠豊肯ハシテ

共ニ無ヲ数ヘ一度陽ニ出テ小早川吉川ヲ云ヒ云ヒ

攻ル肯 明ニ出ヲ戦ヒ敗ル城ヲ抵ル考

救ヲ知テ大ニ其敗ヲ恐キ夜中三日霜ヲ遁キ去ル

蒲山ヲ攻ヲ明軍敗ル成ル遁キ去ル

義弘ニ番別城ヲ築ル 初明大軍渡蒲山ヲ襲ル

軍ヲ分テ泗川ヲ襲ル 泗川ノ城ハ未タ真備ヲ知ラズ

明人十万人霜ハ来テ番別城ヲ囲ム正月五日 之原

洪大男王義輪右大男ヲ出ル二人ヲ捕テ帰ル

状を以て明軍五万余成道に於て倭軍と戦さん
事を謀るべし微道に出て掠へらるべきなり人と
泗川より　岩く　義弘公同番船を大海に浮て
急報相救ひて旦激撃を大軍と防ぐ
ひ人三原義輪と泗川より出て船二十番船と
棄て泗川より入る　傳云三月新納南解や士山に入て鹿と射る虎と射て飯る
義弘公是を称して虎長浦と賜ふ大日寺本源寺矢塚に
七月明の大兵ありて蔚山　按に加藤清正在り　掲報麻貴将軍
五万大村在り劉綎将軍ありて泗川　義弘公在り董一元将軍明史云董一元宣府前
衛人兄一奎以勇敢著一元勇如兄而知略過之云　小西
西軍大に振ひ　傳云明軍五十六万餘て泗川と称し十八万八千八百天三十八万八
蔚山に二十万八泗川に来る是秘図の勇猛軍に冠たるか
順天　按に小西
松浦有馬

故に兵を陽と云皇明通紀云石曼子　按に朝人称倭人云石曼子
通特大海為東西聲援薩摩州兵剽孫悍勁敵云云是を以秘図の勇武
英名遠く中華に震ひ　傳云四月明人竜海晋州に来て和を
求む三原義輪　義弘公に告く　公晋州に入竜海陸路を
通因て人数根絶たるを小西行長に告て是を敗し
二王瀕死に水を飯て苦人時に明軍数来るの流り故に晋州及諸城の兵を新寨
に退く
義弘公曰大軍寄り侵を我軍に敵をん場
偶よ今さまなり故よ
泗川より云て是を深んじ明軍進て晋州より
五万余人に拒て
を丹城小処して明の撫文を教して
山を焼き成を名護と称し小城を大城と行よ

捷くして敵を破る数百傳云大河水にうかべる屍と戈心幾千万と云ふ事なし 或云彼と
接戰して雄藩を剣一山林に揮る揮は揮ひあがることくなり
に光輝を放つ 苦辛の中に苦辛して明を興す
為に治を久兼早晩為院を
辛年敵数百人出て治を
と連数を報備を為
あり 故に明兵久兼と戰ふ
典史龍遊典友理書 青
百万水陸攻む傳兵既小死傷の二條の生
と為るうん中に恢を揚て帰を保ち家を保いと
策なしん 乙四書と使者に典
切にして豈敢をして山の前
四章を典して使者と帰を 傳云先是南京の人徒毋の流にゆて十五歳
高船に乗り薩州に来り類姓氏原の農民
養ひて孫二郎と称し後に類姓左馬氏の僕をうけ左馬氏卒し明の徒毋と亦死たりとせり
南京に帰る時に明軍に在て此時の使なり 岩恒乙稚子為左近左更中田助左衛門泉川城
外に在て鉄炮講に助れり 回我国此器に妙手なり
石発百中なり 明大軍船を以足し孫二郎を振て去る
九年久兼横を帰して 義弘公典久兼を
泉川小入て之を且理心 傳云理心は明の沿陽の人郭国安光禹と云及び
の為都に到る朝に旅して帰る日本に流る 私に光
禹日本と見んと欲し故に是に来り永禄二年薩州京師に至る時に二十二歳 義久乙
是と為て請別に居し沿陽を氏と理心と賜て書檢付事の為に大慈寺

の儒と二人後て軍中に在り理心の子孫治陽義右衛門なり

小命して歌を詠ましむ時に明の副將茅國器の部下選詩名舞妓の傳の當り出でゝ詩を捕へて状を問ふ言次第して長く嘆ず色
切なる書を出だす色を憐むに女傳小唐詩をもつてさ
云んと欲ず情を尽して出して贈ひ帰を將軍
報せるなかを我姓名今乃後堪四人の父名は武
あるの日年をさの拙と知る洪曾清解して曰是部
國安なり參謀史世用曰國安は華人也市青州麗
唐別坊帰まて是を洪將大よ收て曰彼僕

乃當に存り是を用て國安に書を舞の賈
人に結ひて國安に送て曰九月廿日市帰の當を嬢さ被
と賛て是小意をよ理心　義江よ若を　乙理心を
儒て國安に明英をして洪ましむ理心通輸
駅て曰今月廿日被を嬢に明を洪ましむ市
帰と賛を嬢に明を洪ましむ
朝に至て久兼国市帰を嬢て泗川に入る將軍洪て
川を渡し市帰に入る　傳云明人察せ実に國安を間諜と按に武備志帝
京明人の諜器として望帰と嬢くに共に邪也久國義氏理心は泗川に在て望帰に
至る事なし武備志等の説と悖やすし義は親泗川に在て理心と按ノ也洪

說乃邪攻をして破る後日本に在る丸の明人等因安と
五大老に訴ふ　義弘云狀を白して理に罪を免るゝを得たり　川上久爾、永喜と
棄て泗川より歸る明月二十一日　明軍晨陽を攻む赤葉く
退く明軍之當と為めて因安切りて富三進む
義弘云、敵をして養く泗川より集りしの紅氣の
裏うを待て一拳に利を得んものと欲ふ川上忠實
皆な猶泗館に在り　義弘云頻に晨を待て發晨相
良玄蕃獨因兵衛　共に泗館監察　忠實と議して曉　九月二十八日
陣を出んとす夜半陣を焼く明軍石橋乃高岩に
登り煙を見て晨と為す數百を率て舊館に襲

明招書寫先登を率兵突出して書寫を斬り
又慮將切と報ず明軍を期して泗川小退く明軍
晨と為す樓竹より高城に登りて
退く敵は薩軍死傷多し　中軍稍と退て京中に
到る明軍とて追うと雖て射る相良玄蕃射る
吾し敵數人を斃す夫れ馬に乘て安行し敵
乃矢を捨て射る終る九軍の中に射數ける時
俵軍數傷する者數多し獨因兵衛馬を失ひ
退く相良死を覺さず慷慨して自責て死生を共に

ちんまと紛れと我先に進くを見て高喜ぶ
志を及ぼす如き
如國小歸を父加
賀を及ぼる中小島と称し我犯と告る僕の四君義
の為死を平島に捨ふ人の重用なりて
國に歸んや
國小歸しむ僕の
と滑をして若を出島に兵馬馬と為て敵中に
突入く死をる者二百餘人皇明通紀得首級九十二 其の風儒と滑
ちあいなり此に忠実軍中吹く中の夏乃高遠より
門より四人書狀忠也わて三人伊集院忠実程の落

死近拒塞等が宮に走り成田舊舘の軍沢川より退く
四軍島を退かなりて未遂に芭の宮小歸を戒衆して
出る明史に忠実軍敗を賞と兵馬に奇しくして
走り出し忠実敗を敗と人と自後軍にて敗
名九六布馬を持名鏡と敗ち先登乃四将と倒て
侍云重持鷹の明と求て城外に在り旧
能の兵の近くと見て那走進て切と樹ると云
と捕ると出小切と懐く年す 細集院忠夏の兵秋末 明軍敗に出
五六馬早来て敵と斬る
川くと又桜の毒と見て軍と捉て 按に世禄記征韓禄編年
記久国記泪辺記大重記義弘
云長久刎て一人と出ると云他征伐記遠加に
忠長以下の援兵と云長雅と辞せ長皆遠加に記て 忠恒公島と退んとて

元雷同して是を動む　義弘公劍して四大軍後小
枝り龍に向て渡る四門を攻んと近よあらん其時一
拳して敗る事　敵小勢軍是を迎て川上大雲
矢を注ぐ　二番六枝軍矢を注ぐ　四門城内
小勢てるしり下ぐんと　義弘公搦小枝て是を防て
京なれ〳〵入〳〵む迷惑馬（侍云鬼神と
奇怪に称義弘）　名九六右衛門
枝〳〵番矢を馬から下〳〵矢を指〳〵に備〳〵
して死ぬ　義弘公敵薬を賜ふ（侍云番矢を馬に備へ敵の馬と大集ひ矢て敵を敗る
朝の後鹿屋高牧野に於て父馬に成時に　敵の馬と大集ひ矢て敗る敗
國の後　義弘公　忠恒公馬二疋と賜ひ以久禄五百石を賜ふ）

時に明軍　義〳〵番別川を渡〳〵　中軍二星の石橋
家を攻軍夜是を攻んとて　宅同喪八万萬野泳
第力等　番書に忠長　仰集院抱節に　苦〳〵二人
忠恒公に告る　公語〳〵　義弘公小苦〳〵　公四其
石橋を攻んと破〳〵　必せち出る大軍　二星に元川
敵軍の激る次刻の石殺滅る　敵に敵
明敵是を知〳〵　義ひ是切に　敵龍に川を渡る結ひ
久〳〵かもして城を攻る　必せち敵八野に立て疲労
〳〵義を決に投て玩紙を書ひ送を心賞を結ち其

疲劇と激して兵を整へ一挙して破らんとす諸の指揮
を待て十月朔日明軍淞川を攻む　義弘公整て大小
兵を發す初九月二十九日明將率十餘人を率ひ城と称し
川城外に来り　城と云ふ　三里　楊朱と云ふ人来て降る
を以て命じ兵を出して見る
明日十月朔日翻出可攻新寨須論其故出寨將
勿彷徨
俗し列を卷て俗を定め　義弘公出陣公自ら大小
兵を率ひ書狀を以て北方を守る城兵を出して迎

黎明　十月朔日黎明　通記十月十日条　明軍二十萬淞川城を攻む辨難て
に掩ひ金鼓地を振ふ　按に敵乃毒々の話説不用征韓録云所の下刻世
年記に所の下刻毒々已の之刻冊に附し　梁記云曙久國記辰の刻迄加云日出元負記巳刻編
皇朝遷記辰の刻とあるとは
義弘公二回城中を巡り出て　薩軍整出して戰ふ
敵の中を突し　薩軍出て戰ふ　又多號と称
義弘と戰ふ　敵と論じ　敵と論じ　其敵乃
乃橋に出て指揮す　明將芽國義葉邦栄彭信古大
と攻め郝之聘卿乃之馬量又藍芳威左右に俗へ
董一元を中軍に將たり　已刻より明軍敗り

係む蕭軍奮激して矢炮と發さんとすと既に
附ひとりに出て先と沖を出て洪軍驚て矢炮と
發し敵と発たるの戈を交ふと云ふ 忠恒云先
乃橋小登て 義弘公に渇を急告に二瓶走て城中
より出て敵中に入る 二五四瓶人をつれるの躍なし況平
大軍の中なれば先稲荷明神捷軍と示をもと天り
而て抜く 編年記云二百瓶菜門に出り二百瓶水口に出り 城中大に騒む 忠恒云降て
始乃橋より帰りしを高橋と呼て敵数人と驚を又引て
矢射の四軍奮戦 乃橋と暫引 身陸乃板 橋上に在り

用去板りて遠く着し敵先と以て思軍と以て有馬次右
衛門尉を楚と掛て先と掩し公の法明の二度次右衛門尉を法
鉄を 侍云公と指ち者 長船の如し故橋に水と塞り橋に上り桃と注へ水と奉し 彭
伊東云宅十四歳 忠恒公に侍して二度水と奉し
信右城小と攻む軍中本橋を破くんと忠恒多勇猛
連戦を 久国記云はひち猪山と云て城と為んと欲して敵を殺り
枝梧して先手と共に中と水に流し桃て又折と云 本橋破を
捨りて沖し乃本橋忠恒を思熾を掩ひ震動して
震霆乃ち 久国記元負記に鉄炮にて敵の堀際を破て攻と云也加に薬桶を
大鉄炮にて打破り云朝史士重一元傳云一元分馬歩交攻歩兵狙撃
彭信用大指揮塞碎其数虚弱敵軍進逼賊濠毀其柵怨嗟中賊裂糧絶滅天賊示撃
衝撃固城援賊示私云固城の援兵多り 騎兵諸将先奪ち一元示還晋州
鄭小示一つと用さ鄭を生ん 上示の邦を奮国降元

先づ列して突入る（傳云後に記田吉兵衛と称し秩父郡飯能に住す）岩恒公の親戚毛乃
名馬小糸り池出川表出入登に出り和田義盛家臣孫田
次郎本脇三郎次郎衛と共に四急卒に馬を乞へ
切り出て野に出て敵を敗し（傳云岩恒公西門を出り又云神奈川諸軍撃出せんとせり敗回 義仏云神奈川諸軍奮怒して出城を於是合戦交て門を開く一戸を宋て未一戸を開く後諸軍競ひ進て出川朝野元廉と云是也）山内義軍勢を頓ちく
出川勢ひ烈風の指葉を拂ふ如し明軍敗さ廉
亡を逃ひ北を逐く是を斬る数を知らず 岩恒公馬を
馳を高に出て親敵と斬戦ること立て長む
和田次郎野清十郎清十郎走毒の衛乃右に乗て許て

回恒く進んで切て士卒と奉将に非を伝聚員
昌血又を振て来るに金ふ 公高能として二人と思り
馬を乗り単騎にして又進む応進ひ乃ふ
明軍石仏人列を成して退くに云ふ二人殺と乗て馬を
乗り 公乃馬を駆て 公思るに乃ち乗り又 公の肩を
突く 公屈を乃（則房作の倘と云ふ）と抜き二人を斬殺（傳云その傷深く馬を示病）
る 武人進て来る平田新右衛門宗信廉兵衛助走来り
是を逐ふ宗信を 公斬る孤の敵の首を乗り又親戚毛
川来て奉しむ（或云宗信 公に海を岩長の浜和泉清左衛門
逐て問ふ知ること能に尋て答ふ云）又を

進ぶ北ロ二人敵と組に倉ゝ。乙其敵を斬り首を新て来也又宮部三人乃ロ より打ち出む又敵と進ぶ二人等是を従ふ明将鄭信古ら軍神こゝの如人是に到て六十人を出して走る大童花敵貴重物と逃る忠任乙是と選びらして特選カを抜き馬とう首を斬る義弘乙遠にをえて是を捕ひ

当書次忠長を小つゝ出て沖ゝ乃敵を報ゝ猪ゝ

京て進む華國慧葉邦冨家萬俗兵狩猟甲冑悉ゝ

赤ゝ西小乃丘に在り俗兵を嫁と初ゝ成ゝ

列と四ゝ俗と書ゝ敵噂ゝして城に向ふ忠長是を見て

遠小宮と見ゝ川流を俗んて是を俗ふ敵進ぶ

忠長乃出陣既に敗んとして出水猪乃勇ゝ指揮して

流を出形と示次忠長亦出て奮に進て自敵を南北

終ゝ流寨相敵場を忠長の軍大に是ゝ

横山檜原久高高橋新八郎忠吉山田新乃丞

久義川上源之郎久首法国院寺久国 新網泳を本乃忠嬢新

網南中久宣川上久春乃久春二渡次寨平利

遥を是と見ゝ北岸を登ゝ是を焼て敵の陣

軍と対ゝ明軍驚騒ゝ自深淵を忠長乃軍機

に京ゝて甚苦と是川伊集院抱是一軍と率ゝ

為て進て鬱川敵終に敗走して旧陣に帰る
義久高久兼当小敗と思て切るる神　義弘公は
関ヶ原の軍と聞て大に驚き丘上に
一軍横入るる所に向て義久日横入を出て向まる
義久はいまだ計り勇しく然ども弱無なり然に
是に須更して崩るる勇て敗し　公軍を期する
項之　忠恒小荒と敗る　侍従大山之次郎家同道と歴て敵乃落に回る力戦
而後人を鬱川新網久宜示進て敵と逢て敵を蒙る川と久智寺山久家其意を救し
ちりとり示力と侍従敵を以進て来る敵を敗して久宜馬
永春と泥波の石川ちる細流ちるいとも深して渡る

屈しに石切ちて終に渡る所を通に一元軍出る人馬と
保川を渡る所面の如し　薩軍渡る中と浮に瀬蹟
自水走りて石切小磐ちる肩と射ちて敗る
ちる敗ちる　武弓之主水吉敗倫絶泗川の軍　忠恒公敵五六
士卒の者と知ちん人ちる人ちに敗ちる主水吉は自若たり以高く呼ちて
主水石敵ちると口ちる雪猛の士卒と浮ちるかたし　公乃初る孔也怒解ハ死と鬱
ふりと悔んり出せりと霧に七島に流に後　公須清に進て採門川に沒海星後
殺して與云小屈ちに庇泥川に似ちる　公沖て主水ち莫に及に其言と称に
侍長状と若し若今夜乃云と浮ちる久ちと云て敗ちる　公其敵同と怒り久保
七郎田中源兵衛尾と仁兵衛に命して殊せ　む三士七島に　主水命と義り
酒と出し三士に盃に妻に妻ちる長力と取て進と出ちる水
芝と出ち間に入て妻と言し已亦自殺に冊に送る書に云
然ちとちる作りんさと義ちる西ちさせんのかと泥ちれに
石なとされんとりりのの切腹と作出されれるる西世のりと若し

やうなりけり〜

又辞世の俳歌と称し
一流説
世の中〜はかなき夢の中なれば〜ひとつ夢とぞ思ひなす〜

赤旗乃敵射と者を分者ちて川と久者ひ坂と指示して
兵と撃〜む中に敵決死と称して兵と撃て久者ひに先
きりて加と称る吉田大蔵太夫信義院抱義諸軍と率
して兵に接〜敵大に敗北し 忠恒奉馬に敵と
加へ〜進む馬物と纏ひ〜忠恒兵和泉国に
と称〜纏と称〜後兵に奇りて進む諸軍進〜
晋別川より多の明軍者ち〜者水に溺ち者百ちして

数〜敵既に川と称て隨ち目西山に過る故に軍紀
明て 傳云敵已別に隨ち軍別に泄川と云事也云々 是なり異本に是紀伊国
也葱て敵と対取兵泄川合戦対面也此分ちち
桜山仁左衛門 傳云是軽ち元貞記 仮野士久木山仁左衛門と云
今日敵と斬ち者一二百八十
七百級水に溺も山林に死ち者ち〜と云ふ〜と称
傳云明人出百八
八百級人と者ふ 義軍死ち者多〜と称人 上総国士高来十郎義
俗作佐士郎戸口法七 乃ち
義弘公祝敵に人と斬ち元兵と称人 公曰年刀類侵
〜世乃然く海未出〜者ふ〜者ふ〜 忠恒公七
人と斬ち時ふ 義弘公川と即寄忠兵と石〜て
忠恒壮子血乃定と〜て 怪疾の動紀義兵紀

急に此其側より来て　傳云忠恒公の馬前に在て共に敵を撃つ　伐て是を止む先
行に忠兄日戦闘の際将帥としてかくも心動兆なくんばいつ
つくしか危しからんに是より元和幕府の雄壮なるを
感ず　傳云国人上野對馬忠恒公に従ふ公曰公攜を取て敵んとし對馬撃て取て殺たちて公敵を取て對馬を撃川備くる二ツ血流る程殺川けるなし後に此攜落川　義弘公對馬を賞し氏を攜口と賜ふ
を建て兵を聚め　よて夜明の原野に馬路　一本松といふ今にあり
を建て兵を聚め　義弘公大将旌を　忠恒公に讓り
備圍を行し　傳云　義弘公黒糸威の鎧を著南面して將机に踞し川上忠兄冑を捧て左に在り川上久智長刀を持て右に在り　忠恒公は紫糸威大鎧の竜紋盡たる鎧を著將机に踞して東面し蓋傘を横山久高雄刀を取て左に在り川上久前園扇を取て右に在り元軍大将の後に在り　忠恒公親撃処の首二ツ　義弘公撃冬の首一ツ実検を平田宗位　忠恒公の前に備て　公に静まりたる敵の首を捧て来り義弘公のたこ当汁に並　義弘公太刀を抜逆手に取り鋒を下て右の掌に捧ち太刀を

後刃して六尺五寸友倍を太刀にとて既に向て仰ひ首引道畢り左に廻り將机に踞ひ兜
秀吉賜ふ所の小象の甲を取て兜ひ其後ぺて南面し合掌して咒を唱へ久倉
太刀を奉取て身刷し七尺五寸友倍し文咒を誦して
角南窓の二々九聲年を發ひ元軍これに和して終る　出是城小入る時諸軍
出て眺に殺まる処の敵の首を斬事夫より門外に集まる
数なるに三義八千七百指七十余の耳を斬て日本に
送り首をば城外に埋め塚を築く数日を経て蛆
生して塚を崩さて後塊を掘ると中央間四方にして
是を埋先とに松を樹て験とし地外赤瓶に備へ
死せるあり元日是眺に城中より出る者あり瓶より是
福昌寺の神瓶を安置して我軍を勧む大々を放川て

赤擣と燒しめ流れ代くに死るなり於是瓶と沈川
城北の丘に埋め大慈寺大日寺讀經して葬る 後に廣嶋護摩所に
祭る今猶存ス 山日に 捷書とあり大老と 前注文書云前一番石
八幡四人高軍勢九人四百二十帖先軍勢六人三百八十三騎殿軍勢六人五百六十四騎殿
忠真軍勢四人百四十六北で紀伊軍勢六人三百八十七百十七此外切捨ハ
敵と知らず追加論云前注文と二日に書クハ事麁率に出るなり必何とるもの前と
斬り大小ハ分に集めたるハ申國の刻に及て敗軍の人民ハ悉く先と乾て前と斬らハ其教信せん
経て注文記れるなり此なり山林入死人反偏く先と乾て前と斬らハ其教信せん
と云紀れ如と衛山とくとく書の如と云渭濱沈川に寄るの時因茂龍孫る沈川
敗軍死人と四ふ法云八百也と云無粮と賊るに八万人の余ありと云敗に高野山石
脚と云ふ八百と紀因書云 義弘云孫次郎と云て明使に明軍沈川に寄るの敗と
同ふに百万と云ふ龍涯の書に赤百万と紀を追加に蕭山吹天に向なる麻貴劉
綏と赤沈川に寄るの明軍 按に明史麻貴劉綏陽と破る且蕭山吹天に明軍寄るに悪く
傳沈川に寄るの不成追加の流信しかたし 殿下の使 秀吉殿に無先きと云ふ
番なるに故に程殿下の使

ミ稼 流永式沈郷法下 宮本長次郎 豊臣沈川に寄り
十月 八日 義弘公に史人二〇〇五奉行 按に沈川法山城を石田治部大輔に成に
皮鞋山城と黄流を院云以甲州府中城と濱野深正女郎
安東大和郎山城を増山右衛門長盛と五奉行と云ふ 乃書と云に
其時云和と朝鮮小仰しかたし 其八王子と云ふ
義貴をんい年無に貢税米虎皮多皮
王子紫をくハ決將軍と收て帰朝を 貢稼と
納ん友人と財馬に寄して賢くを 義貴を
世八貢税一ひ納るの日公今山浦の城加藤に引に
渡為加藤を毛利を攻る毛利を攻る毛利を攻る 將軍高橋と

小西摂津守兵庫に於て黒田甲斐守二軍にして
是を平らげ〻〻表仏を十二月十日に朝〻して勲を
奏し帰朝を賀し玉大老 梅に武蔵守相模守安房上総下総
上野下野沼田の国を以て沼田右京亮
秀家奥州会津の主中納言上杉景勝安芸備後陸奥肥前長門伯耆備中
の主中納言毛利輝元
是を五大老と云
乃八月二十五日 書大意同〻二使沼川を出て
水天に飛く 傳云先是八月十日秀吉伏見に薨死の後大明
朝鮮倭軍を攻撃んとを恐き遺云して是を密に
参謀史龍涯共友瑞沼川を乗り十月十二日 和を成し芳
國家を平渭渡を渡らんとす沼に小西行長
正成兵庫 孫二郎と
云 云に乗り晋州を 和を成し 於是
蓮 傳

再び龍涯陶渡蓮堂一云人使として渭渡 従者二百人 と云し
乗り十月廿七日 或云七日 幸侯正成及び沂長の使 内藤花洋を乗り
客舎に乗り明日相共に中営に宴して内使を送て
渭渡を渡て貴と云幸侯正成是を云く日本に送る
傳云渭渡伏見に到り宇喜多弥二郎殺害に書く慶長三年十二月五大老 義弘云
に命して大明に飯市し渭渡薩州に乗る慶長の本 月薩州坊津榜人
奏を宗安渭渡と稱し大船二艘と艤し坊津と出て福州梅花津に乗り百姓
経て都に乗り神宗に謁す国家等沖く渝に宿し泉州に乗り百姓
して福州に送て通ん海賊飯て告て泉州貴人伊丹屋宗印薩州に
在て是を海賊と誘ひ硫黄の洋中に在て海に商船伝と遣て不て寄る海賊
船と称賊と奏し奏覚して知宗印に下令
捕へ市来の浦に乗り上げ是を明船寄る
て遠く谷山浦に着ん 傳云明軍薩山に天と未
攻沼川の敗とやて本来り飯 義弘

忠恒公も泗川と云 原の刻 十二月 十九日 義弘 十七日 異書 異本興六書に書

同日 申刻 順天の諸將 小西大村有馬 松浦丹波等 と泗川に明軍殿下北

発云と云所 傳云軍奇にして未發と云本紀に 故に水軍乃ち陳

在外の明人等送歌の詩と云て云く

陳璘蠣 鄧子龍馬文煥書を送る胡舜將書

軍 名 傳云宋水軍と軍し泗川のうしろと繋んと

朝に陸多数に順天の倭軍と繋んと 其義子

陸兵戦艦数百忠清全羅を尚之道乃海口に先し

倭軍の帰路を遮んと欲し行長島軍と謀る

ち敗る 義弘を立花宗茂高橋直次等

法華寺に徹して四順天の諸將未参山浦に到る

長南亡と云て帰路を失て帰り文支の豪志ひ

に至て是を追ん庭是に同を於是相共に縋を解き

十七日 又順天に赴く 忠恒公脇に憂ひ是に涙ふる

独りと 義弘公等南海に到り明船に乗る 十八日 宗義智

將鄧子龍先登に進む 蠣軍爽貢と爽し共

船を破る子龍武に人溺死し明史列傳鄧子龍豊城人素慷慨年踰七十

意氣泳厲欲得奇功急募壯士二百人躍上

朝鮮舟直進奮擊戰死倭人奪其舟誤擲火器入子竜舟中火戰乗之子竜戦

死帝長井越京死棲に蠣軍爽貢と爽し其船を焼明人誤て火器を擲蠣

帝に続て進む者多し又忠船を撃破り陳璘書を送る

大船を引出て 義弘に命じ矢炮と爽し大爽

と投て戦ふ其急なること云へからず 義弘公は
馬験と云者ひとり黒田官兵衛 船に花房助兵衛
ひ帰り 按に薩軍死する者其多し明史陳将軍璘逆撃倭
級二百二十七と云寸八分と云なり明史
刻従列傳云戦軍平秀吉死将遂従征半攻泰林要塞斬獲多
石曼子引船師救陳璘邀擊之海中行長遂棄順天城小船遁又陳璘傳
云石曼子西接行長璘邀之 倭小船舞船以渡將船二渡城
半洋擊敗之獲其徒三百余
棄城之死亡高橋主馬頭 棄城して薩州に
石曼子の大将南海島の印を迎て退く 大島花に行長の戦と記する誤なり
出る 義弘公は小船に乗り
船動く 義弘公の船大船 十二反 帆也 みて進動も將船

進ず為り船を捨て引薩軍名護屋に帰る
敵を追て海を渡て船を捨て陸に上り薩軍名護屋
其船と同て撃て敵を破て退去船に石又塩
海に退くと雖ども 忠恒公を殿軍として
長善島に於 十八日 泰明 吹風に乗て
洋中して 義弘公の帰り給ひ 相共に長善島
帰り給ひ 横山大郎三郎 忠征 十二代孫久
殺人の子 要入 松浦と忠政 法忠績と称し要入家七世 同 松浦久高
乃長子
偽て働く事と潔て故に船流て南海の岸に乗り

敵船進来る事なく次に義弘公小船を棄て南海の
小釜の南海を神宗對馬守義智の守り所なり義智
既小舟にて城小人なり故に高麗人是に入り敵甚だ
繁く人と通ず此時に岸蔭小船一艘あり源野掃部清
源野清六源七 共に掃部の舎弟 長清六郎兵衛尉 源七郎
通ず唐島の通門なるを知て急ぎ出て對馬
小舟房 掃部世孫記文貞記に源野等清通加以對馬船
等清通ずと征韓録及追加以對馬船
侍云 義弘公本國に帰り源野等清通ずと云
悪く敵を撃ち馬と撃使して死と長清六郎兵衛尉
人々 敵 義弘公作戦 泗九郎 伝集院源助 代官 有馬

次に唐島に敵を撃ち馬に命じ南海に到り出でんとす
掃部清通及て命と述べ唐島
敵を追て命と述べ唐島
不聽於是敵を共に行く
自候小舟にて海岸小舟に乗り唐島に渡る事泗九郎
義弘公 義弘公唐島の迫つ小舟一艘の迫つ小舟
ゆゑ船と出して迫んとす 岩蔭より命じて是を出
しむ貞昌等唐島に帰り 桃下 是田忠 泗九郎
等く五百人大小敵中に南海の海岸に出て
敵の船と約り忠勇對馬の小船二艘乗あり 傳云對馬
守義智陣

の跡落遺たる物を拾ひ為に来り追加無報
及び馬人の妻女の姿を強奪すると云へ疑ひ
歌ひ笑と偽り興長島に渡る 傳云其間一里小舟多く来り
ひたすら嘉に人を乗せて漕ぎ
拾ふも接の船来りしに又唐洲を渡と聞くや
小船を用て大軍渡りかつ〳〵久高吉田大藏竹
内等弟と唐島谷山浦の辺に来り接と云へ
二士四頭くハ接と去に付て従軍来朝
人数多くして我来既に帰島ひらくや
百姓人を以島に於ちん報来て谷山浦より報
糧米と貪ると聞し忠征と国に帰らしそ快と

忠征久高大

久高等是に於て人命を全うして唐海に出る（廿一日）答
（廿日夜半）義弘公行長等と唐海を渡て出て出る
山浦に落ち寂として人なし　舎弟同時に船を
解て帰朝をと〳〵と今や幼主を信と共つて
悉く帰朝し獨又七郎忠豊乃ち推子島（今山浦に在）より
去る　義弘公と侯川立小林等の三百人にて松と我
（二十日）對馬國厳原八重出水に萬さ十二月（十日）晦前
國と共に入る夜しら波軍を出て帰し　二公は連せら
津に入る淺野弾正少弼長政石田治部少輔三成集る

其切と労ひ物と為て津を発し名護屋城（隆景居城）に入る出是
安藝宰相秀元淺野長政石田三成初て厳下乃
夫を去て豊前國小倉に到り是より義弘公船
より大坂に到り（十二月廿七日）伏見に入る（二十九日）忠恒公と石田三成を
芸州播州備前戸しら淀小上る（侍云播州姫路茅野より人馬多く出て扶る）貴人に入る
龍伯公と伏見に上て其善なるさと賞る
慶長四年己亥
正月（二日）義弘公忠恒公要樂城に登て嚴粮を賀
五日内大臣徳川家康公　義弘公の邸に来り私に大切と

美して太刀と　義弘公二字同後　忠恒公　備前長光　小脇差　中務大輔忠倫拝領　式部太輔廉政　井伊掃部頭直孝　式部大輔政長　井伊掃部頭直孝　太刀一腰　馬代と　義弘公小姓　山岸道阿弥序　よりて　義弘公に若く曰　島津廉之殊寵乃ち自ら　自分　海を渡り　命令して　謀りよ　人又　忠恒公に渡して　義弘公　忠恒公　大老の　に意　要塞城小倉　正月九日　五大老　川の　大様と　義弘公　正字　本庄宗正　號に石州也　乃ち　脇差　且

薩州別隅二州　より　の直轄　薩州別出水　高隅二郡の　内隅州加治木郷の　石田藏

隅州清水　数撰の内　細川幽斎　隅州宮崎村　高隅村　羽柴筑前守　肥前　石州に　梅北の時始て薩摩　大隅日州諸郡郷

其地と詳ませに経歴正しの時秀吉公　又太閤　忠恒の四位と分て賜ふ惣計五万石　今　の図全く義弘の有と成り薩摩国惣廻石　石六万大隅国石十五万五十二丁半内男人高十七万　十三町の図九十五万七十十四三人高十二万二十四石五万八千　丁六人今に至て猶然り○侍云秀吉遺言して曰秀頼十五歳に及の間禄と賞ふ　故に石田三成性貪と沮んと　家康公四海平の伽羅本本朝に比者也古今無双と云り　厚し　他例に比し　減少に減書云忠功　忠功　賞罰給せに京伏見に於て銀三貫目と　人に借る　内府公　と　伝示常書に　判令五百枚と賜ふ義なし　薩州　より　孫四次右衛門　の人と　辞に　公亦貴人　に令して　田海平家　孫に太刀と樹て　秋朝乃　拝　拳を　琴国に　挙く　軍く　忠と　辞せて

忠恒公正位を　将に　侍せて　長光　の刀と　賜ひ　侍云　長光と　て引長光と云　薩国に　秋　て　銘と　二字　彫る　且　藏書と　二公に　賜ふ

陶山

侍云朝鮮人数十人を捕一書て薩州市来野に至慶長八年冬伊集院苗代川に移し今に至て二百六十三家千四百七十余人陶冶を業とし又鵜州鹿屋郡生駒原に数十家を移し今繁栄なり市虎門記云伊集院幸侃朝鮮より七八歳の童子を捕一来り忠真の僕とし後帰依天福寺に居りて備と為さんとし朝鮮人尋ぬ玄て田王子薩に別に居りと類に返さんとすと雖て国中を尽て得ず天福寺の門を視し朝鮮人等九拝して是也と云て去る○又云備と成る処の帰依平松の門崇敏の山庵を作り三十人住し 義弘云禅と鵜ふ是を帰て共に飯国に苗川富仙安忌伊集院に庶四人を捕て共に飯国に帰ふ三人捕して日国に帰る云を親戚故門共義弘云禅の人なり 義弘云の題と交りて既に浦と云て飯ら故に天と為て士と〜仙人なりと故 光久云知年侍後戦の帰さら其分たる者八一人を飯国に住と云○武野端淡云慶長十六年の比朝鮮の男女老く飯国に心朝鮮王是を術〜 家譜云延宝の年又賀使和鮮より書り日光山に渡り系文を綴今書興宮と称〜今炮竜と称し今猶存し

今年 義弘云伝聞に在て国に帰らん家康云の命に問〜秀頼及門府に対〜忠義成そそを色さの断書と称〜門府家康云も示断を書と

鵜ふ 義弘云宰相小河〜 按に口宣なり〜と云 家康云の書に薩摩宰相殿と云故に宰相に称そ〜

疑なり〜と云

剃髪して 惟新斎と号を

二月 龍伯云病と得て国小帰治 按に考文長二年より伏見に在り二月廿六日大坂に養し

三月九日 忠恒云戦に伊集院右馬大夫忠棟入道幸侃と称し其子源二郎忠真庄内都城小十郎〜叛〜依〜 忠恒云中務太輔豊久 初又七郎 忠豊 帰と得て国を

私云庄内一乱 忠恒云の傳に記し

西藩野史巻之十四

義弘公下

慶長五年庚子

中納言上杉景勝（愛別舎侍従）朝せをして遂ゝ謀る

家康公是ゝ於て神石田治部少輔三成初ゝて秀吉

公に仕ゝ俸例彼疑遂小憂庸せをを五奉行に仕

切別に佐和山（二十三万石或拾九万石）に封ゝ交ゝ疏異ゝ浮立ゝ秀吉

薨して秀頼公未幼ゝ故に遺言して成童（十五歳）

及ふ除改ゝ徳川家康公に委ゝ中納言

上杉景勝右京亮使行義家（當時國八十万石之主）を富小藏して曰
とや天下の諸侯秀頼公と棄て家川家に事ふ太閤公
乃至千彼有と聞らんか為せり未だ秀頼の独立たらしむに
敢ては家康公は甚だ怒り服膺食ふ〳〵は吾徳義を
聞く無と雖も一黄乃河と藩とを渡り第〳〵に安に
物と定め京猶會津より帰り来り義直を接く
家康公敵無と成し六月十八日伏見城に家康
江戸に為府を開き忠岡藩次右馬頭家康公（共に家康公の子）
を以て伏見城を守らしむ　惟新公は家康公の義軍と

遂りて山村乃出て守りに為り　家康公曰伏見城に入忠
在り君を軍事に老を守り彼軍に指揮を　惟新公
帰して伏見より帰る（侍を伏見城と惟新公に敬を命ずるの命令と長發軍と日甚事を）　於是二成
無と大坂小早川秀秋の命弧矯秀吉の恩と報ずるの
と言と為て坂に義問を西乃諸侯廉を以て是に
與て（尾濃以東は家康公に属し）　惟新公小磯田藤に伏見城に入らんと
為忠岡藩　家康公の命なきを拒む再び新納
旋斎と共して四　初　公奥州別義軍の為伏見城を帝
に託せんとの為に帝に属を　公と帝也

更乃雪ゆゑ諸兵乃勢ゆゑ
をれとも島居等閑く振て旅を対に城又 惟新公
に対て曰公を殿下托庇の人うら蒲冠宿徳とをもんハ
義兵に属をよ且去年折紙書に謂ゆゑ秀頼公に異心
をもんと人々真に命拒ん兵言と食ゆゑ偽く 惟新公
諸臣を舎く後を美曰方に日州 伊集院忠真叛し 小平方
薩渡の軍を忠恒公に従ふ敵の軍敗北に
恒を貸ふを入ると海を獨立を嶽 新 進退実
小窮まり城の言と示却あり兵に属して石義をも

屈しゝ 惟新公出ると海をして城に属を 神氏記云
にをんと欲し為兵等態し 公伏見城本丸
云示二九に入て渡る剣と文をもと欲をし
多人小拒して 私云他州の 城乃西方を攻し 惟新公を
軍陣なり
去職の将を乃死を子少人敗ふ敗北して城兵乃芳徒
弾ゆんし 或説云中務太輔豊久味兵の出たるを撃て直に攻入んとし元忠采神と為て
暫く又撃出せんとし豊久軍を遮るを一町元忠其疲れるを見て拾に豊
久未陣陣中に於り他人を渡る兵乃死将云入来院又六重時薩軍先隊の将なり
松尾氏に仕奇と為る久留休森松尾猪之助等 薩家味隊に為て仕奇と為る松尾八郎
別小留家に仕人武四郎兵衛世に属る其裔神戸
五郎為兵や又云淡四郎永押川六左衛門味中に俱に今
八月 伏見城陥る 神城門図窓の光り乃火を挙て陥とをて
鐵砲中網云秀秋乃軍中火矢を放て城を焼く元軍

城中に乱入して　神氏記云薩軍仕寄の間より弓鉄砲を発し伊藤吉六駆動隊
田川俣仁左衛門等指揮を受け仕寄の外に出て朝日の未明に城を広瀬
城中の石を投て吉六の胴を破る山清助右馬吉六を投て陣中に退く又仕寄の外に出り
他の陣より孫太々々城より敵出るを呼り仕寄奉行新納孫右馬吉六を扶て死を扶まして
攻寄終に松尾
により攻入る　薩軍進て松尾を攻今五代金人松尾備前
先登をなす　神氏記云松尾勝之丞矢筈間と寄く城中より其勝を百くらく
松尾引きて石垣の半に登り終に引揚て高所又弓鉄に為る
とも死せざる敵に関を出るを中ゆるきわを大地に在て備と為す
惟新公に従て薩別に師る敵新将間八門間に攻る敵と組て共死る　此時法華
小敗きを元忠家伝載て薩軍利不利野未考松尾
を厳沢家忠　伏見城中大書に下総国小美川
二百石主七世の孫今の与厳沢忠到肥前浦和の城を
家忠見記云浦和より弟将別府下野守進築地之辺
家忠家出て進撃し家忠左の腕に疵を蒙る城中に
帰て自殺沢年早六
首八下野是を取る　元忠戦死を聞て　家長自殺し城陥る薩軍

凱歌を唱へ大坂城に向る浮田秀家石田三成等戦して
家康公の旗を奪んとし軍を分て攻別より到る　此
惟新公は長大隅に三成の使者八十余騎を松
数十艘を清水く　公を法山小迫　侍之三成八諸将に先
今の潮水遠風雨を遮ひ森山雲知川より松尾を
河を渡て松を破る敵を追ひ一人も撫を八幡山　松右氏云
嘗て長に曰ク
・庶民紅衣家の旗　小入る　傳云公八民家に入従者
軒の下に在て夜を明
城に入る成璧脇と異く　明に晴る屬し澤
濃　小三日留り大坂城小入る　先隊八黄揚に陣八
岡崎に八樂田に陣八と云　秀家三成等

城小入くゝ拵ふと雖軍乃先鋒浅田二郎為府輝政
福島左衛門大夫正則等尾州清須小荘ら之城
惟新公に告て曰東軍既小清洲小本に須賀川城
就くゝ来ると雖須賀ハ極要乃城くゝと雖ハ西軍
発ゝん公に申ゝ保如ゝ　惟新公諾ゝ
後て是と寄ゝ　一説云洲山に於て三成是を　公に告く故に洲山ら須賀に取返
神氏記云　惟新公須賀に都く付洲川と称て自馬と號と
立て諸軍城ゝ統て浅田此川国ゝら大河ゝらと云も徒渡云んゝ云ゝ試に是と渡
是惟二人深に成て去の歌と渡る水乳のごとき人竹と云て曰此ら下ハ浦ゝ急に切る竹ゝ
用意とも二ゝ出ゝて　須賀に到ら陣も
神　公宿泊ん小社ての日急と薩別に告
軍と為て故に洲津中務太輔豊久所多長寿院

侍後に見ゆる　伊勢平左衛門貞盛　伊勢貞盛乃弟
義弘公に仕て国老に任ず　大田吉左衛門
桜に大田氏其先　久豊公の二男薩摩ノ守用久の次男下野守　延久に出川延久河
辺と称ゝ平山城に居ル延久の女ハ　勝久公の女ハ　豊久公ハ
薩摩ノ守成久と善ゝ故に河辺　忠品公に献ル南郷と賜ふ後恪佐乃城に住ル
日新公の為に謀せ事ゝ其子中務太輔忠成嗣ゝ　并周防守忠資家法継ぐ
其子周防守忠実公加世田の城に住ル　貴久公命に由て
大田氏冒ル忠好ハ其子也ゝ孫大田今之長右衛門ハ
稲留丹後入道蘇松ハ也富隈に居て
龍伯公に仕ル朝鮮関ヶ原軍功ら禄百石と賜ふ
乃侍後
に出ル　**等寿**と日ル継て須賀に
小指と剣て屋さを大坂邸に命ゝて其
同十三日大坂に到ル　公に渇を所に三成来ゝ
国に在て武功乃者也ゝ成丹後に留ル
随分の忠と而ゝ戦死ゝ　ゝ云

濃州波阜城小ゝ中納言織田秀信伝　信長の嫡孫やゝ西軍に

屬して東軍を以て是を攻む（八月二十二日）夜半須賀谷を渡り西の
東に向て大に鬨を作て是を焚し敵兵乃至雷霆の如し
惟新公日是東軍波奥を踏破なんと（傳云秀信東軍に降る）石田
治部少輔東軍北波奥を攻るとて樋長と辛しに
渡川小路（二十二日）田中吉政本陣吉政黒田豊前長政生
駒雅楽頭本川を渡て進撃す二城秀家陣に波
奥の張りとやらく大垣に退く（久田氏云中務大輔豊久八左衛門に中て
大垣に入んとす云云）波奥豊久に渡て云る神本黒兵衛
廣とて豊久其小姓と危む本田日向守既に傷りて
本田其外と敵して相ひ戰ふ羅軍歩兵多人
故に敵て本田指揮して多羅と戦ふ一將と数所休憩退く
惟新公猶波奥を守て東軍川波彌に出
て是を禦く指揮の者ども押川八郎兵衛
指揮して水と共に枝を切川是に流して
多鹿と海行て是を捕（水中に首級を捨て帰る敵矢
施と戦ふ）乃て時に二城来て宮中に
大に騒して日東西戦闘一乃切ると黄金と呼ぶ
小河内源左衛門多羅と戦て敵を撃川に
國廣の太刀と呼ぶ（惟新公大垣に帰て後二城来て日暮に義軍敵と
討事とやらん）
云云二城怪て大垣乃左右神其辺奥方やと大判金一枚と呼ぶ或云云
と行んと者に成刀と取に遂事なに押川八郎兵衛首実検の所法華忍也故に金と

共人○神氏記云薩軍始て濃州に来て敵と戰ふ於長河内源之丞野
村泳次郎と辛し敵陣に近て之決死と誓川歌長と近て二人進く薩軍長
と迎て源之丞決死と変て先登の奇兵と敵を本田與三郎敵して進く泳次郎
鉄炮を捨て退て曰士武器を捨て逃る者は犯もやと後帰て取る望
日三成来て曰昨日賞很に於て能く敵と射たりこなりて来る甚人と見る角〜源
之丞は泳次郎と称して出て見ゆ○此國四年八月朔日一切発令と國度の大力と
共に○侍云惟新公古田與三郎を召て共に賞して藤次の方と賜ふ

東軍既に
紀伊国久乃渡しを渡る故小三成等悉く大垣に入る
後之

惟新公も決候の曽と云て大垣城外樂てに陣を
大室記云石田小西吉久渡に居り惟新公入来院又六川と久吉馬新網矢を馬者入桂清と等候
共十人と辛し吉久に並て石田小西に会て波奪陣に東軍既に沼波と海る三成大垣に
退く事急なりと云て去る新網川との二士三成事と取て曰惟新公衆の為に命と捨て
と云公獨退は不義なり三成石誠して去る○本紀体化馬と義力と振り濃州の
今難度は吾地と云て吉久と海り事る惟新公曰
千人の勝ちり吏ら決候乃兵と義く辛て大垣に入る

九月
家康公
乃二子

小命し下野国宇都宮と守しめ京師に備ふ
自大軍と辛し武州江戸と発し九月十日東海道と経て
濃州小垂の大垣公家康公の先三子信に將軍小任人東山道と経て
濃路小出んと欲ス 内府公内府八内大臣乃家名將に之内大臣なり濃州国山と
陣を日十四大垣城中間諜して出ずと三成小出て兵と引て出川洛田小西と軍と敗る器山
より中村一学有馬玄蕃頭兵と出て逆戦ふ西軍利
と將を引き出て大垣城に動く侍云惟新公八豊久等と共に民家乃梁に蔵ると如き是に上て見物八出時

薩軍九数と称する者と（西に黄）（黄と
集て総員二百七十餘人なり）

豊久 惟新公の命を受く

三成の営に到り命を乞へて曰く長途を渡るの歓と疲
驚し小憩小休して惟新公の陣に帰り進て国山を登る
公長を率て義弘の西に向ふ惟新公の論曰高
地乃好ら拠も西軍既に十数小隊を曰日廣野
に隊伍を整（一戦を利と浮んで営を指す島津近
三成家老 席上に坐て曰く敵は不意を襲ふ弱兵寡相敵
世ける此類小用也（今や戦亢して彼寡し以や
関原乃雄略勝て此ら乃豊久思て曰く関原乃

ゝん勝ても此ら乃何ぞ関原の怯懦と見る
左近曰く我営て甲州小荘に山敵に師を高に屯し
関原乃と戦て敗回其敗を乃と見る豊久曰く池其二
ゝん其二を乃ゝん公乃信云と軍を撤（乃や年未弱壮
四十と強仕と云 小西乃ゝん謀に忠を練熟ゝん今や武器乃ゝ其に
老て中勇猛乃其和小西乃ゝ乃と知ゝて見と侮敵
敗乃ゝん乃ゝ敗し乃ゝ豊久海成敗を計る（可ゝ乃と
安して太閤乃ゝ此関ヶ原戦を乃ゝん乃と嘆して帰る
惟新公曰く三成謀計乃ゝ乃ゝ安乃ゝ是乃ゝ撤人貴成

生ふる城を惜むて〻山に惆悵して山に（傳云此時後藤又兵衛基次主人黒田曇守長政に
告て曰島津義弘軍に向ひ今夜必ず岩山を襲ん備を立ん人ゆへ〻長政 家康に
告に公曰憂る事なかれ我已に敵に備へり 長政能て基次に陣を基次源く是を発せしに
公既に森豊後佐渡守高虎
に命して密搦に備へり）

曇守長政長盛中守忠興松平下野守忠吉（家康に
当進て岳井冥を取筆〻備へ〻〻大垣城中延歌
〻て田内府公一軍を以大垣を攻んと
三成当城〻て田内府公大垣を攻んかを聞く〻其なし
且又軍糧道切て城よりなん今夜間道を経て是を遁
んにかしかと三成 惟新公云秀家行長当二更（十時
四）搦に大垣

を発〻南宮山の後牧田乃谷道を経て関ヶ原に
惟新公（大垣記云四下刻大垣を出て実制寺に来り
山岡蔵軍藤列より来り間道に到て後先を〻）三成小関野に
備へ惟新公小清水村に備へ（三成の右
に已に同）中村左衛門尉豊久
入来院又六重時所多良長秀院盛淳久家吉村小
西摂津守行長を川を隔て〻備へ（小清村
乃右）西小
乃山に中納言秀家備へ（八千余人）松尾山小早（其間一里
余と同）
施新中納言小早川秀秋備へ（一万五千）南宮山に
毛利筆頭秀元山下に森豊後守秀勝
寺恵瓊長束大蔵大輔正家長宗我部土佐守

元親（山上山下二万八千人）陣をもち須田乃陣に續て大谷刑部少輔
吉継平塚因幡守戸田武蔵守脇坂中務大輔
小川左馬助朽木河内守赤座久兵衛等陣して西軍凡
十万八千六百余人なり東軍ハ亦陣を立る也先
鋒ハ福島左衛門大夫正則（加藤左馬助嘉明田中兵部太輔吉政等是に加ハる）其二黒
田甲斐守長政細川越中守忠興（一柳監物直盛等是に加ハる）松平下野
守忠吉ハ其下井伊兵部少輔直政ハ左に在て本多中務
大輔忠勝ハ右に陣す 内府公ハ中軍に將として三万
餘人軍陣ハ宇多川吉次遊軍に陣す京極修理亮

藤堂佐渡守ハ松尾山に向ひ池田宰相輝政浅野左京
大夫幸長（蜂須賀山内有馬生駒中村等是に加ハる）等ハ南宮山に向て陣す東軍凡七万
五千二百三拾人（平山氏記云赤坂戦始まるの夕に白旗二ツ出ツ東軍の陣の前なる流を渡り敵陣に向ひ又立帰る衆の中に在）夜明
十五日 霧深くして前後を辨せず巳刻に至りて猶霧
として散せず井伊直政 内府公乃命を請ふて
先登し自ら小勢を直に因を発し中務大輔忠吉公乃
陣を衝く忠吉公大将として敵と近江より急に撃んと
を誤て諸軍馬ととりて塊より鳥銃を発をち
うけを待ふ（傳云長野某ハ赤合戦の始りに敵に向ひ是を撃ち首を取太刀を捨て朽木の川を突見に示して云今日の一番首なりと足下に沈撥とす）

敵の為めとなて出て戦死そ

島津の軍近寄くと見て馬に乗り出て

敵本陣押渡り来りと聞て真先に進み出て

後日義せん為に薩軍一度ふ合戦と叫び矢を

小橋に山田有業を惟新公に敵の近寄く

敵乃ち馬を捨てにと来る豊久は立く敵軍に

寄入る豊久に薩兵思思に指揮と為て

寄入る東軍相用と定めくさいと云薩軍たいと云ふ

軍の中にくちかつて豊久有業等指揮して薩軍北

勝浜（ひるまさきはまかけと後に押へ）と捨川志摩敵陣深に入て惟新

警川は在り於是孤軍大に東軍と破る

惟新公後軍と率て攻撃し長宗稲葉

加藤小西等の東軍繁多く島津義弘薩

軍奮戦して撃破らさい河福島正則加藤嘉明筆ふ

浮田秀家と戦ひ田中吉政黒田長政中川忠興等

石田三成と戦ひ幸長一柳戸田筆ん小西行長と戦ひ

浅田濱野ふを南宮乃敵と戦ふ小西先敗きて去る

毛利秀元を南宮ふ在て竊ふ 内府乃に心と通す

故に出て戦を吳山上にて山下乃敗を見と顧ひ浅田濱

進て山上に居り秀元兵数を石田と惟新に
乃ち猶備を置して敵小南北に対す三成小谷山の
を使として 乙に告て曰西軍既小破る三成生答して
て必死乃戦と為す 公海を渡り戦軍と動かる
公諸人暫くして八十島渡を来るとき云んとして薩
軍等書を投と思て新んとす 小谷大に敵を去るを
能して道路に出る三成自ら馬に乗る既小無し
陸と称る豊久曰とこの戦を切に戦に生るを人数
新に至し乙成を義弟に渡更に東軍に

敗るを伝聞小谷山小西て道路
跳梁秀元秀秋神ち家康に図変に西軍は敗
とんで玄蕃山と下る大谷吉継為兵を敗
浮田秀家の後と敗川秀家敗して伊吹山に走る
侍云亀井武蔵守東軍に内応に使と惟新に遣て緒告て曰敵大に来て危
しと援兵を乞小谷井三郎三侍兵衛尉源九郎曰源次郎九郎等を遣る玉の比西軍同
時に破る 石田浮田既小敗を東軍に西薩兵と撃り 小谷忠倍
来て洪軍と指揮を 忠倍軍に徒撃に敗に内変に用代
して石田と破て又来て薩軍と戦 薩軍名
流と変り忠倍備て馬ち薩と薩軍進て前と敗
らんとし忠倍乃ち馬を乗せ去る 按に薩軍忠倍

と雖ども未だ傳記に見ること少し中興の新撰諸家系譜等に氏
侍と稱し[illegible]と記し系譜に[illegible]を稱し西[illegible]
[illegible]と敗し[illegible]に走る藤軍粉骨碎身して戰ふと
いへども未軍勢多く新渡たるを以て[illegible]川薩軍大に潰
惟新公諸軍を指揮して四方に[illegible]に急なりつゝ[illegible]を破て
退く為て[illegible]と雖ども[illegible]なりんかと[illegible]て[illegible]と[illegible]く朝と
せよ幸に[illegible]ちんん[illegible]薩[illegible]敵[illegible]未審[illegible]西軍悉
[illegible]と走る[illegible]敵[illegible]南に向ひ神[illegible]軍陣[illegible]
敵波數く[illegible]樂なかりん新[illegible]
と破り牧田[illegible]波多原山に向て退く如戸藩下士石川氏
云関ヶ原の[illegible]薩州

人惟新公乃退き[illegible]公[illegible]西軍北方に向ひ[illegible]
背き南方の東軍と敗り既に敵を[illegible]て多賀山に入る[illegible]進九て敵を破るなり退くに
[illegible]或説云惟新公[illegible]に入んとなり牧田に出て大垣のほとりに[illegible]
入る恩渭[illegible]大垣城[illegible]時小牧[illegible]且軍敗小敗を大垣孤城保川[illegible]
恩[illegible]恩婦[illegible]と[illegible]乃[illegible]小城に入んや
[illegible]言[illegible]有見矣[illegible]

関原に[illegible]と見て[illegible]日[illegible]軍列[illegible]未全[illegible]南[illegible]
軍中[illegible]と[illegible]故小東軍敵て[illegible]退[illegible]
江府に[illegible]時[illegible]江府山田山田孫九郎八今に寿命[illegible]貞品曰今八民部と
称し猶[illegible]云何の時[illegible]知らや三孫四郎ヶ原軍中平東照宮乃近習に在り西軍敗
[illegible]の時近侍の小臣[illegible]て出て敵に平[illegible]を取て進む薩軍の退くを見て呼て曰
後殿の将[illegible]て誘と接し其将[illegible]て山田孫九郎也と云て[illegible]と取て馬を返し眼目雄
壮[illegible]南[illegible]平[illegible]人[illegible]
五[illegible]芳[illegible]故に知ると云 惟新公[illegible]て[illegible]退く[illegible]時福[illegible]
刑部[illegible]正之武[illegible]人と[illegible]卒[illegible]薩[illegible]走る敗て[illegible]

福島関に於て織田右衛門尉信長の兵と戰ひ小義軍大小勝たず中務大輔豊久の子
豊に命ず志賀城を守らしむ公豊に馬を進めて死を決せ
んとす豊久涙を拭ひ將に死を決せんとせしめ
公既小勢なるを以て今に至て何を張まるや宜し公此馬を
引去れ於是豊久從者十三人を左右に従へ西の方に
敵小隊を當て一戰に斬死す

注に豊久は惟新公の孫弟中務大輔家久の子也父に従て日別佐土原に在り神
又七郎忠豊と称し朝鮮軍に功ありて侍從に任じ今年三十一歳本国運大居士と號し
るなり 敵死して佐土原城収めらる慶長九年 家久云善入據津守忠續乃

長子三郎四郎忠棄なりて豊久乃治嗣となり豊久の弟源七郎忠直のかと妻氏
中務と称す義州永吉と賜ひ六千八百石を給ひ亦嗣なり 家久公の八男久
雄嗣なると國なり安藝と称し其子中務久輝 光久公より 古貴公に至りこの世に仕て
老中に列し其子中務久賢父に続て老中に任じ其子外記久儔早く卒ひるがし
弟久柄嗣となり主殿と称す其子又七郎久世方長久の弟源七郎忠直
神君大和守重直の養子となり國命に中て長崎奉行となり
久儔法名となり病故に長女として故入忠直に嫁して豊久乃後妻となり
石を分ひて更家と樹川源氏と冒す豊久廣八樹山氏と嗣ぐ次子九右衛門
忠氏と冒す忠氏と輝し兄乃氏に中て東氏と称し其子源七郎忠辰初て本城
氏と称す 老義刈 那本城八祖忠直の采地なり 父忠教義に中て
其子七郎乃為輝薫なり 樹山久神此弟と樹川久輝他腹の長子久重宗家久輝此女と妻
弟八郎左衛門久敬後劍峯と称し神代家と樹川
し嗣となり中務久賢と称し故に久敬亦久輝他腹の長子權左衛門と妻なり後
養久置と称し 古貴公致仕の後若老中となり其子養久亮先世島津氏と冒し
○久輝の次男中太郎政一更に家と樹川小林氏と称し寛永四年大
目付に任じ其子金に列し其子中太郎政 長子久世方長久の弟源七郎忠直
久賢家に入る 長子に入る源七郎忠直なり○久輝此女
実弟なるも巧に妻に通ずるを以て侍之間に揚髮なり

小田原

軍人笠家彦右衛門豊久乃首を取る豊久激戦して創を被り
のる　惟新公二百餘人と前後に從へて去る　敵兵中納言秀
秋大谷平塚を破る二將戰死　脇坂小川朽木赤座京極藤堂
ともに大軍を率し薩軍後に迫る　惟新公憤激して
曰吾今死を乞の時至れりとて馬を返さんとす　長壽院盛淳諫て
曰吾願くハ君乃姓名を賜て爰に死なん請君謹て　公と
して國に歸らしめよと元諫して　公乃馬を駆て退く是お
是盛淳馬を兵庫入道惟新也と呼く東軍乃
中に突入る東軍競ひ聚り盛淳力戰創を被りして

隱

死す年四十三歳首を得きら　傳云畠山中務少輔重國除髪して橘隱軒と號し洛陽北人や
天文年中亂を避て薩州坊津に來り居る一男二女あり共に僧となる妙善行院に住し
後に安養院に住持たり　義久公の命に由て還俗し長壽院盛淳と稱し氏を稱
せらるゝなし老中に任し今年五十余歳なり子なし安吉と稱し盛淳後と云んとす
と欲を以家資乏く河多神左馬に屬し妻吉も妻に妻し遂に河多氏を冒し
長吉後同經長宗と稱し後同に任し二子あり病にて家を嗣く　光久公乃
子淀後同經る嗣子となり義枝と稱し後に式部基明と稱し元禄十四年宗家
此免を得て畠山氏に復し内經る子ハ
庶子となり基明乃孫畠山數馬なり

此時薩軍散亂して　惟新公
と知る所なし　川上四郎兵衛　公に後れて毛利覚右
衛門に告て　公を求む毛利云殿は　公を尋て來れり
東軍之面に攻入て死す　傳云毛利ハ神宮司善祥坊に住す
勇壮の名其あり惟新公召して禄千石を賜ふ其裔毛利香太夫是なり卒児ハ絶し乙比後ふ
山田有榮ハ既に三百騎

去る豊久と申す家臣有馬玄蕃頭と田間義兵衛
久惟新公に出会申候て
是を敵とする二士衛と敵り是亦大逆之輩義田勘兵衛
敵と名馬を疑て逃しむ　惟新公従兵に成人東軍也
敵に命ず未脳刑部大輔其中に在り眉尖刀を取て
敵に有禁と思へ〻〻大京収て田是下れ後無と備て
南らん是下へ〻〻来〻　公を守護をよる家臣
公と思へ〻大ふ敵ひ者に東軍と敵ふ　惟新公敵
敵人ともるる数四後醍醐院者を備宗重極深して

是と云む所に西長春〻後醍醐院に知〻退て東軍是と逃
〻　公と逃て出是　公乃馬験　然の度とおて一本
枝れ形の如し　と見〻〻義
無怨五十人ほ召ふ後醍醐院宗重本御祐品と陪臣して
退て〻　侍ら後醍醐院氏基光後醍醐帝の皇子良懐親王に出り親王伝南将
軍に任〻肥後国に在て菊池氏に高う南朝後醍醐帝京と去て和州
吉野に都を定て南朝と成て衰て後親王の子武人となり後醍醐後守源良宗
と称し肥後国北辺郡に住し七世の孫宗重なり後に法名道波庵と称し天正中
義弘公代に在しの時長たらんとて隆信と称るの時第主秋と共に　家久公後
切と樹川主秋公伴と称て死し先是宗重相良義陽高橋氏と冒しも親
戚に列し故に高橋と称し後に姓を父の姓に戻る殿下伝西北時
宗重と〻て郷導たらしむ宗重婦て田吾院に島津家に属せんまとそ命に
従ふ二心也殿下怒て小西行長に指ひ故に行長に従ひ朝鮮に切り泗川に来り仕と敗む
義弘公評之帰朝して喜ふと辛ひ薩州に来り仕ふ禄百石と賜ふ後五石分
加賜ふ其子帯佐に至て浜田栄林と号る貪賊なるる如し　其子帯嘆して田栄林
武名本朝に高〻猶如此吾僚者に在て松平宮内大輔忠雄

に仕ふ次官内蔵頭父と同く我邦に仕ふ其裔今也蔵人也　楠太郎三郎忠燈山田民部大輔
時弥九郎と云　之藤殿をんなと爭て屋まを故に大野弥三郎
二人を代りんとに武人石穂時ふ　惟新公是と忠燈を
と滑をして世く世に有藤殿に忠燈石藤の色竹故に
用ひて代りて後殿をも也　侍云ふ廣七物歌歌と
川上郎三郎忠兄と　内府公に使して田指使男ふ在り時嫌に
入る　内府公強過乃悪と鞍をんとん名居内友穂を止事と
潜をして西軍に與し忠に遣ふ今や國に帰り我社授
乃事に取りて忠恒告祈して穂を煩をんとん郎三郎帰る

ふ乃んて　惟新公に従る伊吹山の麓を廻りて去り　侍云　公後と命もるの付
四命と述て後代に後代に帰国をして　川上久宗久智　忠兄
押川六三郎久保七三郎是に従て　の弟　川上助七久林　忠兄の兄左衛忠盛のみなり
按に久智久林に拾ち後ふ　押川久保八遠七後七三郎　下野守
忠吉と井伊兵部大輔直政百騎人と率て是と遇て直政
先登に進て忠兄今日　柏本源藤　柏田出石に後ふ雅や　与兵と爭て
是と爭て直政備て一ちの高川源蔵大に呼て四川
上郎三郎と出是来軍直政と爭て川に忠兄たりとん
按に此与兵今に代子孫に傳ふ架朱雀に弾重十
十文源蔵の裔今に川上弥八郎宅地ふ伝ふと云　松井三郎忠兄
て忠吉ふ又と接由既りて組て松井伊ふ外ふ力と爭て

忠吉の日と偽り忠吉の代士為氏九郎阿知波太郎
為走帝と松井と新田と忠吉の子と投帰る玉見東軍
迫ハなて忠兄等今く退ゆと海を渡り　按に古聞録等の説書忠吉の事也　惟新公と
迫ハ敵に忠兄等見ゆ賊て栖木等切り伏て後　公と迫て合戦ハ忠清代て
軍代遣ると迫て伊吹山に向ハ忠兄使して後伊吹山代赴
に迫ると賊ハ　公ハ南に去り忠兄ハ北に去り直政　と迫わさるゆ明け　且世源記関ヶ原
実記慶長記乃接り古聞記等誤まる事明ゆ　○傳云忠兄等ハ見ゆ京師に到
る神　近藤信輔公宿津左近の所忠兄を敵に侍して善知る故に　近藤伝捕公家に富を
伝捕公時に河内源氏為朝と山伏に変して門前と通る忠兄栖木を出て見と知ハ新田彩八郎
久元者入橋津寺忠吉町田源六郎源二郎師　長崎帰織部等　近藤家に留る
信輔公妻と見と庇護ハ一説新田彩藤庵顔姫主水此列に在とする説ハ
敵馬に遇ると云ハ朝鮮国石敬に罪せる由年三月ハ久智　伝捕公の使として薩州
に師る　伝捕公乃書翰云内府公異心なし　写く其人今に伝て海に到ま其書今猶
川と家に蔵む其後元亦と出て浮国ハの桜に忠兄ハ二河ゆる忠者の二子なり神大欲以
と称を登城ゆ　惟新公に従海老中に伝ハ飯岡て薩州古聞城ハに捕ハ元和

八年三月二十三日帰依別府川の別業に卒ハ年六十二浮屠清居士と法ハ号
に葬る長子大膳太久恒後依法寺と称ハ羅有て利せるゆ別ハ法久親と称ハ
父の事に仕せ　長久後に配せる　義に卒を嗣るなり　加治木士者本新九郎ゆ
長ハ法に出師　為ゆ和奉行に任ハ亦るなり　市来氏と養ハ今の浜八郎也
惟新公根雑穿蓄して栗野に到ハ人樽馬使る長崎義弘
大依寺盛秋義に陣を為ハ今　其間可十町　南宮乃法軍既に
野ハ与く栗軍也と賊ゆ　雀敵乃亦初色ハ
公使と出て試んと後疑院者為ハ深て云南宮乃
軍横後して両陣と持て壁親其中に去り禍ハ行ゆ
ゆ乃ハ遇ハ遇ゆ　義小切ハて伊勢安為矢来を
行く　侍云此時元寇困て忘気奮わハ此使と称と云の河未終ゆ元寇使共と
清ハ元長豪雄と感と後に山田有栄死に除ハて子孫と敬て平三軍乃

綽んて未性懦畏縮の紀なり〜後世を貞盛親に続そうる敏未なり　惟新公
平氏と源氏の盛衰と没るまて志を決等奴力して雄壮と励む事〜

命を待〜て四秀郷公の為に粉骨と尽し　我軍悉く戦
死〜終に従兵と幸〜囲に陥り他日見下る澄ん平氏勢
四波小五て盛親野に向ひ寄入く死なん終〜ちんを馬と
車輪小乗て見と示さんと単騎駆て敵く死を尽し
矢を流と待〜貞盛の進退と尽し　傳云所に二将軍と来生てな
敵に泥陣と献ん　公見に生て後り　既ふ
〜て平氏勇車輪小馬と知を流安坊　按に平氏貞盛　義弘公の老中
たり有川惟樂以貞真の長子
無来浦の品ハ貞盛の宮かり　或流云後に或云長徳二年　肥前国唐津城主寺
沢老庵寺の子無庵改に婚姻と幼に貞盛等を沢家老中竹細新蔵と其事に無り故
有〜惟新公幼と愛せんと欲を流見と識〜て変せん貞盛四郎始より此事に無沢
唐津に別て愛せんと後共五十二人と幸ひ唐津に至り新蔵と見て之神〜り其事後

幼世を見不誤り国中り新蔵怒て幸人貞盛国軍て石殺〜て帰り天幕に至て新蔵来
り茶て四出布茶幸ひ〜茶と進て鑑せん貞盛諸を法に踏ひ力と帯せ〜て亭に入る新蔵
力と接て斬う貞盛見と捕んと偽をて拝進む新蔵迎て其力と大集て斬んと附て大体
を見馬を出て貞盛と新殺に貞盛と士数戸石を抜外り走入て妻を馬と殺に新蔵演
に走り出貞盛の後出に向ひ意結在て貞盛と殺に自殺して諸君に示けんと云一人出て
其首と奪川　於見後出蔵別に飯の寺澤家より貞盛の死骸に新蔵を首と
副〜志別全く見と新〜に折を書と齋〜寄り見〜り出人鹿児島逐歌〜て四貞盛迷
て斬きたりと　惟新公四貞盛勇敢也逃避乃士に非に戦と平松の妹に在て見るに悪く
面〜り偽て九右の指の後割を〜り於見後沢出に貞盛今年二十九任集院妙寿寺
薬るに対薬せ之城氏を〜り殺に薬せ七人後ふと云貞盛の子義盛と称に牛根に
城氏に任氏其を孫八郎貞盛の子義盛と〜て平氏貞盛と
称氏其子平氏貞盛中通目分に任氏其子孫八郎　飯奉行なり其子今九平氏貞盛
貞盛反命〜て四東軍敗〜て一人と損を氏一人と奮戦
〜公乃後小従〜大坂に到り〜　編年記云長来正家と盛親
二人郷導と出氏今夜　と同名陣と列を貞盛義に到り
暗に到り所て飯氏　駒ヶ岳　或函ヶ岳　と称〜て至て敵陣に至て敵所に至〜庇亦

労而惟新公庇小命〳〵て甲冑を捨し心底不背主別
に至る〳〵公自取〳〵〳〵野小捨川 傳云花之の本郷金解者因幡花之城
大林寺〳〵矢野と称馬に鞍と称て有る
横山伊因懐慨〳〵て曰 君の甲冑城小捨る悲懐を〳〵
何主の國ふも奪て落〳〵 紙をんい死んと九て英房
傳云伊因英て大坂に玉京拾壱岩山に頼し 如是又庇小命〳〵て捨し心伊勢国右馬出
進て〳〵羽のごとく〳〵 公ハ庇と共後小浅ひ左波多死山に
入る 傳云此時公に従ふ士所謂類矢泉小一郎桂太郎左衛大野泉三郎大田吉左衛
門泉小一伝兵衛平九郎山田氏兵衛尉木脇刑部左衛滝脇院要左衛橋爪法左衛門
泉左衛七郎横山伊因二郎宝泉小六吉田六郎左衛門岩田雅楽丞遠田左蔵丞木田源兵衛
小源五郎良吉郎矢野久次本田吉郎兵衛大原七郎左衛門飛脚会人徒須田義之郎中島大蔵松原千然胃木五左衛
門泉小二郎源田吉左衛木原七郎左衛門飛脚会人徒須田義之郎牛尾
泉小六郎吉田六郎平山七郎長山伊六郎左衛門飛脚久義末田伊右衛門宝田清吉

宮

援兵甚多為南部黄左衛門横山雷次郎
玉林坊荒田郎二郎桐野掃部助安楽五郎左衛門松原市左衛門豊田八郎左衛門安楽小
左衛門任長院伊五郎黒木太郎次郎松木源左衛牧田吉左衛門松本源左衛門周防八左衛門
山下三左衛門中山平左衛門宮多孔十郎乗水七川と六郎左衛門小左衛門小源三久
の長志摩出雲守宝性長田三郎宮内蔵左衛門谷山伊左衛門板垣長左衛門和田義左衛門小者
大重平六 元和 統士 猪山与八川元長八中間小川長三左衛門紀伊熊左衛門橋口新馬等左衛門等
従て大坂に到る入紀伊左衛門久多民平六久保善平ハ
泉州堺壁山に於て腹と切て泉に到る在田の士也と云

従摘取り大山と戦て任敗国志〳〵さし出川

傳云伊賀国上野城下に至て薬九郎波大音
ふて鳥伊兵庫次通る地と呼る味長寛出し蔵軍兵と戦ひ味兵二三人と斬て其余と
逃て前と行は結果て通る事波天性放蕩不羈の人なり曽國と出るの自書と編て国
切りの〳〵ハ祿と鶴ん川内川に至て以為此書と懐にたるハ甘と金〳〵て業と合る様ひりと川
に投〳〵て去る飯国〳〵て祿五十石と賜〳〵〇 神氏記に 公大山に出て 国府に泉九
波と国の北荒に出るく以兵数三千六百の〳〵や何者ぞ説りた伝を〳〵ん〳〵又編年記
云九月十五日 公水口に出り新国ひり大軍兵と守る蔵軍進退窮まるりと憂〳〵
公流 明治元年 と先波と守るを〳〵ハ敗て通〳〵ん何の窮まるりと憂〳〵
通ると也 按に水口ハ長束正家城也東軍未関と陣るに帳ひり〳〵旦所ひりた豈之事也と

遁さんや顧に水口城より使なりと
義人答ていはく石井

と呼む　公又松器千然と発し一変に俄の家族を撰ひ
む所に備ひり宮内兵衛　年四十余　弓矢を引て　乙と射んと
元進んで是を捕ふ須臾にして郷氏四百人出て
公を圍む七郎右衛門　公を能くせんと欲して家を飛ぶ人とともに　公後
速ふ立人の目是我ひ乃ち行樹備く是を掠ひ右の民忠て供
と敵んとす武人立人を傷ふ立人の備を教さん我清て
氏と呼ん立人圍中に入て是を告し備とあり郷氏を
統合に入り労を体を　按に是十六日なり　元悉く労を裏と忠教中

田源太郎右衛門口雲ひて小我形して君に代りん諸君我前を
敵と教ふ教を免しあり郎郷藤髮を夜小入て後方を出
氣別ふ郎く立人をして郷導なり立ん立人婦
して日新須乃宮猶後殺を恐る沼やひて導なりと安
舞して乃と教田行事教是包圍路に乗りて矢を発し
元波して日ひて導ひらとんを行事能を是是後洗流去
富相民立是郎日波七郎藤備の家に乗り戸を敲て日供
来乃共なり遂小腰痛と奏ふ頼くて帰と共ひて関
て入を三士破て入て日氣別の立奪なりて郎と共に聽を

三士思て是を待り引て出川に士田聲とゝろくせん前を
別んと懼ゝて田命に送んと女子叫呼ふ津人二人起出て
ゆくんとを或人と制教しく去る遂に乃ち蔵人
を赤衣を（夜明て逃者か）辰刻ふるりて食道寺田院小泉川や
嶋と鵜ゝん浪（一枚）と共に帰ゝ（侍云家濃伝説賀大和河内を経て泉川
を乃ち墨西氏記云此に至て金銀を乃ち山田
氏記に二尺五寸金を懐に蹴乃金を脱して軟し紙を
ひ移り鞘と巻き組皮の袋に入て帯し姫路を
乃郷導て帰して後泉刑部寺又郷導すとおも求む教人出川一人教て筒守に帰し往
古に出川の侍云堺に出て元服田沼田右馬助乃家人恐て迎
ゝ紀の中なる僕を
取て教を

堺津に田招を道共乃

惟新公に知らしもて（侍云茶湯を公に文乃）

是乃ち元田是に教ゝん或を

とこの時人乃ん計る色しゝに浪や道共賢人なるや若者
消せしもて病となるん或云家乃ら八道共と報して
自報をんと遂切ゝ

笠（乙）**是に国を人をして乃共に告**

む（侍云此時罪蔵して金に之し故に如此）

公事元多なるを（侍云なんと疑なるんと）**桂太郎**
乃場若嬢として元小渝して田沙華を以て粗雑と経て家に
到る若嬢見て是を乃大坂に到ら史人（桂雅新公家久公の二史人大坂に在り）**笠紙**
保て国小帰を（神代記に是を住吉の事と編年記大宝元年評と）**元是に肯を自報**
をんと公論して田大坂を二史人乃ん紀に利り
報ハ濃腹潜りて人の寄に宮ゝ若石忠辞をして

西なり元明後〜命に従ふ糟屋郡宇美宮中田原大宮司
宗像神代矢野久次大重二郎太郎人乃ち 乙に従ふ 俗云国人稲口野馬
陣中より公を盗み奉り伯耆 公に献ず 神戸記に
後九寸丈弱の と賜ふ公を長に子孫に伝ふ 石井大に歎ひ西野
坂小弟り沈没して 公と迷て公肩書 女示物 と献とる上指て
俗云福山野乃小柴〜云真乃青毛或八黒栗毛云名馬也住吉明神の神馬に献ず
公の船に乗の付菜来て二三町にして船り落に上云国人俗記
云此馬数疋捨〜またり国人小川浜三左馬記に沈没稲口野馬有馬吾れ乃大坂に赴く
道にして藏〜て云馬分に成敵八郎て船〜ん川沿船て敵肩と来て船る日後れ敵〜
今見に乗〜て世〜の宝物たり二人に 書に宗里と通浜乃家に入る 大重記云 平六道浜
感書〜孫と賜ひ子孫相伝ふ
二人
陪後ふ 伊勢 西原乃馬 白浜七郎 黄右衛門矢野久次小坂
供竹 右田浜 三郎道浜 乃船に乗る 俗云十八日源氏に乗る大重記云夜入人乃船に乗り

公伊勢貞盛と西て田乃原に出て家小来り事すして国
小帰ふも大坂二郎人乃妻子と来て〜ひ生と金り妻子と
捨て迷乃誠と得ん事浦く船小塩さり油断浜と誠
せる事なしとんて大坂小自報をん左衛人を走〜り
大坂小出て諸〜む西田左衛門尉家 老中 中田兵衛入道
相良日向大坂乃在り武人小と濃して国に帰ん乃と謀り
秀頼の桃事に出て田惟新乃家小戦死を海の坂乃
武人等怒嘆小堪を方に粗をるの如〜頼八嘆と得国〜
帰て其内と歴をん桃事乃と報て 神氏云元貴誠〜て仙秀坊祈念

備と大坂城に入て訴て云惟新秀頼公の為に関を東に戦死し故に夫人嶋を渡て国に
帰ん 忠恒公の夫人八涙ぬぐひ答辞なく仙秀一屈亦中城中に在り不食して涙ぶ
於是惟新公の夫人関を出の筆と呼ぶ（冥途記に釋元の事と云）敬ふ 忠恒公の夫人八帰るべき給まん
亦大坂に在て夫人ふ往んとすと青んぜんとす○或説云亦謀て侍
女松と称して 忠恒公の夫人と〻〻夫人八惟新公の侍女と〻〻国に帰ふ新世相良
帰ふ
亦大ふ帰ひ使を怪石に馳て 十九日 惟新公に告ぐ 侍云松本市左馬大坂ふ
在て忠功賞して禄五十石を賜ふ大坂師と守たり〻〻六世元禄十年より乞て高宇石汗恩
能記船州吉田持本つの禄を賜ふ七世の孫今の松本勇養也や○又云奥山左近媒
州の人也能他云ふ知ると国ケ原敗軍に蘆人数と禄を所に割禄有て云蘆人と匿
さん重罪なん苦辛せ共ひ〻ん左近云事蘆州候に知〻〻〻年ひ〻宝歌に眺ら
利ふ走て恩と云んや杖持ちる事に無聖〻後に惟新公左近と蘆州に〻〻賞
と賜んと左近云我髪脱に傾を怪家翁〻〻む後に又命有て田五十石加賜ふ今其
石石米十二石を賜ふ席次毎に給せ〻む
国と欠く故に年俸十七石ウ十と賜ふ藤五郎亦左近と改むる孫奥山正左馬也
公大ふ歎ひ道共ら家を出て大坂に到んとす 十日の夜 道共曰義

船云して 公と大坂に逃るるひとまを 一説塩屋 坂乃入口 孫左馬 坂乃人
と云共ひ〻ふ船と義む事〻〻奥運の存ひ為人信と守ふ
公ふ亦知ひ是と云て諫ふん 公諾を如是乃共孫
左馬と云ふ船と求む〻〻孫左馬帰ふ〻〻前貴を於是
孫ふ入ふ 大重記云遠に人なく矢野久次大重平六と書と早道共ふ
是に従ふ所ふ消て 云ふて伝聚平左馬也と称ふ○侍云道共
世法毎に蘆州に来て 公に見西年老路を〻〻志と遂ひ〻ん〻と嘆を於是体帰康厳に命し
本家と化せ洗書と化て道共に賜ふ道共に賜ふ大に収て田是と拝して実に 云と拝を示
ふ〻〻と已に家に奉して毎に拝を 公逝去して後初堂と化り松齢院と号し以像
と初の道共形てる孫筆誠して云民家是と初る末世御押乃畏ひり京師林光
院相国寺内 云ふ道ふ孫や故に家と移し〻〻今猶存を○侍云 惟新公道共と共して
禄千石を賜ふ後道共 乙に古て田乱ハ公に仕る人を表てもるる〻〻形〻 乙に仕て
禄と譲ん於是仁孔義人教家の次男能登と〻て道共ふるとせ〻む道共今
井氏と云ふ故ふ能登今井市之丞と改む孫今井市之丞是也

先是東方師起る　薩摩人海船の事に
聖ることに世に多し　大坂に在り　公の城ふ
在りて夜半　二十一日　纜を解き城ふ到る始度の家海岸
に在り船を岸に繋て大雷を半ば出て雨ふ言く切
薩摩の船の中に水夫を乗せ大ふ歌ひ　公に告て
公の船小家り　今夜実刻　城を　桜に道典の居所法院用ふ仮坂に　公の到る
処或ハ住吉と或ハ城と仮系譜伝編年記
沖奥往記太閤記等に住吉と仮摩長記神戸記古圖録寺院足法家大概等に城也
ふ大雷記云　公住吉に到り道典の家に入人をして東を所在ふ命して船を住吉に出
て　公を迎奉　公住吉を去て城の始度の船に移る庭以為く事の船出住吉
に到て　公を奉奉と東ハ大坂を去　城に到る大雷ハ
に到る大雷示ハ　夜明け漕て城を出て住吉を去て始度の家
出を見ると云　惟新公の船大坂の沖ふ到る西田太郎左衛門京
小船ふ乗り来り告て曰二艘人多ひと下り男女悲く大坂を

出て既に纜を解きまさに去り西田左衛門道相及日向守して師成
守ら心且秋月長門守種長　日別高城主　の艘を以て
國ふ帰る船なり故に二艘人の船ふ乗り事を
事を知らしめ是を沖を　傳云種長艘人日別賊船に乗り別る或日記云日別
第を沖に到る沖秋月艘人船を見たり
公大ふ歎ひ西宮沖ふ到り船を留て是を待り久しくして
二艘の船到る二艘人　公此船ふ移り廣瀬次郎右衛門
つ是に乗り次ハ船を進ふ西田相模守大坂に留る
士庶皆く大坂を出船を発して京ふ到る薩摩の船六十
餘艘ふ乗る　神氏記云松浦法眼大坂を出兵庫の沖ふ到る城の方より六隻帆船ふ
乗り赤幕を続り稽と多く立て其疾り矢を射るが如し　松浦是を

敵と〳〵島流と取く待付近て是小右衛門維小仍なる人其船小者りと云ひ之矢野久次
元船中に在り浅黄色にて中ふて神巻〳〵蓬席櫂干に綺る人り是則　惟新公の松
是船と寄せ共船に移り
公代技に取掛て注く　立藤左近將監宗義を江州大津城を攻
関を東に執んとそ思ふ小西軍れ利なるとて大坂に到る毛利
中納言輝元大坂城中にあり　小西行長に曰相共に城を守り東軍を禦ん
輝元言辞なく宗義怒て國に帰る其船五十余艘
惟新公船小西行長　惟新公宗義と彼金の文を送り相
談て海路を上り藝州に到り番城して四東軍九州
小西〳〵ハ力と戦て是を防ぐ暫て死せんと図ん是より宗義筑
前國箱松浦より柳川に帰る　惟新公是度激小西る

日脇小兵衛　公乃船に算盤焼よ危船是を論ら注ハけ
是田官左衛門高入道如水豊前國小倉城小在て　家康公
に奏〳〵安芸城豊前國　を攻む　桜に森氏の城守　森出羽守豊後國　小藤種城
出し純九後援小倉よ　公乃従船二艘　大童記云二艘ハ忠恒の夫人の
な　危船に海を森出の大を浪て　公の船なりとし惟新
是田兵部と可小藤人驚て退んとし敵迫る藤人是と
戦ふ尾頭俗にほうろく大筋と云　と投て敵船を焼んとて語て吾船を
被忍小庆焼と成る於是沈老海源左衛門任集院左京有川
三右衛門船頭なり元八夫人乃船に乗り　宅間共左衛門惟新公の夫人
是を助る者や　大童左衛門左衛

大東記ハ大東次郎家傳ハ五郎左衛門ト云ヘリ大東左衛門ト云ヘリ
傳云廿二人 忠恒ニ支人乃 鯉捕 欲船に乗ると云
或ヒ人ヒ 掛て下る 傳云和平の婦女を送り飯氏の神氏記云薩州船二艘八瀬に送り
二所計 ヒ有川勘蔵の船尾まで乗潜り船に乗り戦死
を中馬市右衛宅同伴五郎と戦死ス
敵打論とかけて勇猛婦女を乗せ船と云 惟新公の船及従船各
事ふして日別細治清ハ小西乃 九月 二十九日 是ハ薩小西支人 答
乃船 森江小橋矢一支人の響なり 松浦勝右衛門
肩響と船に乗ると是 忠恒ニ支人と高ハ敵
本国右馬 三百石乃士 従者立花伯人細島小西 公と迎ふ
日別の士庶ハ代少迎 傳云二支人の 響と友船乃来る 明日細島と出て戦神に
宮氏先是伊東清兵衛 日別清武乃宰 支法度の所 稲津掃部助

墨田如水の命と称し無と揚げ日別稲佐流と謂へ
公戦敗ハ如水の和書を松本来と稲佐士富田安藝守
小浜て田野を稲佐城と攻ル是下関を出る稲
佐ヒ富田流て城 城主川田大膳亮 川田伯 徹氏 小倉市
検使とて松本と称る稲津を仕乃帰ハ城と怪ム
宮崎城と源を 高橋右近大夫ハ 石田に共して大埴城を守る 守将権左衛門父
子と報し 鶴崎 の内 と後を 傳云十月廿日又稲佐城下に来る是撃て
敗ハ二人に遁ル叔木平右馬惟て是と報し 奴と待て東長寺の営に送る 故に二支
来援ハ高橋氏の所也 惟新公今度八代と通り営と梅 守兵と云
人をして急に八代より 公ハ佐土原より入る 豊久乃老母 横山安藝

守喜
久女　妻女　帯刀書記忠
長女未子有　と呼ひ豊久乃死を語るに袂を濕す

横山兵部之輔入道紹叙　龍伯乃命を受け佐土原城を襲
湯を　惟新乃示紹叙小告て曰池水城を平り敵乃為に
侵掠しるるなかまと又源七郎忠直　豊久の弟　小命して曰力戦
戮をく城と深入る　傳云公城に入る日忠直黄色衣に水巻の
皮袴を着し　公を乗て人面牛身の者し　大概如此　公
八代小入る稲津藤に八代を敗り死出て長を逐ふ人を斬
て降る　傳云長を逐ふ仮名の七郎と書り　終長穆伝命長綾八代の守将等に命
しく出く早く侵さるべしと雖も綾野尾高原を経く
霧島山を越へ大隅村とをく西の隈小到り　龍伯乃に出へ

再會を賀を　龍伯乃喜慶して曰大敵乃国を破り
身を全くし史人如るに到を幸て国小帰るの庸下
乃存小を以小十月六日惟新に帰る　忠恒乃八郎ら
相伴小薩州父母の駕を迎へ歌と長し史人とをに鹿
児島小帰る
十月薩書記忠長又立郎忠信　忠長の長子後に肥守と称し父に先たりて卒し　帥と
帥して加藤清正乃軍を敗り先長小西摂津守
行長乃居小西天草肥後国宇土城を攻る行長国を奔り
敗を因て移く清正に属と記し　肥後半国を分て行長清正に与す　宇土八代を攻

さんとす英兵敗走す龍伯云に云く伯耆長岡信濃
して是を拒ん二将水俣に至り行長伏兵小倉に伏て伏兵
取る十月二日清正乃井口伯耆水俣藤左衛門数十被戦傷して
警し来る薩軍利なくして退く忠長横撃を
自敵船と衝く竹内伯耆る慶長竹内網右馬進と戦ふ
忠信元朱狩ふ者〜矢ふ出して曰寄津又立所忠信生
年二十に其矢摘ぬと雖ども如ども〜敵震し恐る
薩軍又進む戦ふ日暮敵退く去る忠長を示軍に
功を徳歌して曰 家康乃大兵我国に入て罪をゆんとす

お是濁州蒲生城を修築す幸沢志摩守正成山口
毒を寄せ書を九月二十八日 龍伯云 忠恒云賜て曰 惟新云
戦ふ業を二君ふ至て与其命背とを反書を如て
内府云に告ん井伊兵部大輔直政も示書を十月十日 忠恒云
う送て曰 惟新君と戦して来ふ小罷と講一法陽に至て
内府云ふ見る法ふ是と投書を〜是田如水と示書を
投して曰罪を謝せん汝して君等成保ん 龍伯云
忠恒云回章と作て是と謝す 龍伯云 惟新云の千件
恐と責て曰今や国家乃安危社稷乃存亡を是如く

其罷 惟親公乃一身小在り（私云撥云ふか） 惟親公恐怖して
渦別揚陽より蟄居せ（侍云揚陽は因幡野邑藤清庄之儒親に老親
乃居光と云ふ 公義に位をゆづり三年揚梅樹様う
梅田今に存せり 私に云十月十六日黒田如水 惟親公勝を書云 公此時逼塞〜 大悔者
龍伯君 其時若其罷と謝せしよや依之蟄居をゆる平侍記其日と載せ此故考へし） 敗序
と絶て罷と 龍伯公に謝して四嘗て伏見小をるの時西郡
因幡ゟ出て伏見城と守らんとし二人軍ゟ公に成ゟ黨報
と計んとす諫ゟ激勢ゟ出て先を防くに先しに出し事 後
清を先に出公 龍伯公ゟ〜〜忠を出し親鸞宗家報
麾出田勝と恵報ゟ其子猶右 侍云今年春 惟親公伏見に在に親鸞
惟親公命有て猶右と近侍せ〜む依〜 龍伯公 忠恒公の使者として伏見に至神
父子同く伏見に至り直に因幡原に歸〜 因幡原の軍敗て後 惟親公に

後を伯耆山に入をり〜後退と成て城別敵馬山に居る時小
東軍敗る後陽より入り山に事直友敵報来を分
別て〜藤と搜〜絶小三人と獲をり先を伯集院忠直
日別庄因小報とるの時 直友 因幡公の命を請〜日別を
遣〜時小 惟親公伏見に在り市田親宗をして忠友に
為〜日別の指南をし〜む故小四郎ゟ三人殿を戰せ〜
もんとを直友適ゟて三人と教〜藤倉を立て味方と
三十四 惟親公伏見にをるの日奉行等秀頼の命と称〜
西軍に属せんもと後〜龍を伏見城小せ〜て入り

守らんとすのみ二度名所問友堂に招て入まつる 惟新公
従容激切して 牧進退に進て 去辞 宗秀新公
文の折紙書 共辞宗秀新公 冰若有之歟事 遠て
して職小共を忠友 問府公告げ友史として再び訊問し
書辞前に問て忠友答る 問府公の命を伝て 親矢を
薩州小隼人 龍伯公を 治陽小平りて罪を謝せむ
親矢京師を出て 十月十日 薩州小隼人 十月二十五日 統信公告を
問て 侍云忠友親書を親矢に授て路次の驛を 親矢奥薩州
小隼人忠友直筆の書を 親矢京師小平り 龍伯公
問府公に渡らんを 動む 従者 親矢 既に問府に
極刑を免を 賞を 問て 忠友 親矢 親矢
渡を 親矢中を 警し 誠心を 告 折紙書を
作く 親矢 其略云京に在て我国の事ひらん 落ちなし 以往猶 親矢 問府
公の為に為て計らた 親矢以住洛陽に至て 特如我国 頓人 要後 二君に
仕へ

十二月 中旬 親矢 ちて 後京師 到る 問書
友に 授を 十二月に 親奥忠友に 問く 龍伯公 忠恒公
んて 惟新公の罪を 罪を 謝を 伝の言を 告を 問府公 問
龍伯京に至て 謝して 可く 於 井伊直政 申す 正

信 使節寺 山口忠友渡韓之人と離別を使せしむ和久井富
忠政と共に或云忠政に 偖忠友富士に渡り十二月十三日発足 忠友書翰を云先に
於絶筆 忠恒天の書と見て二公の遺行と知る故
井伊忠政と成して 用意に出て忠に渡さん事既
小城に二君渡海より帰り八月報を告る乗者
別を書く是を以て 按に世子綱吉家宣等の誕生初り和久井富
に殺害十月国に帰り十二月京に到り和久氏と国に帰る
四年発使命を奉して幕府に到るなり 親貞歩途中にて仆る
惟新公激怒と大敵と成り国に帰る世乗て流
号を称し且音信京師より在て常に我国乃雷武を送く

故に二士と号して是を赤穂義士と称す 知恵日別号を帰り
国の霸を俗と詩書と称して四二士国を出て堂塞に
帰りて武備を厳し 我国乃雄壮を示
惟新公の特色鄙小塞居して敬畏乃意を表す 先門
帰て告んと欲すれども直友名を繋て行と無き也
十二月十一日 忠恒公面高吉我坊 授茶院祖 と京師に
書を忠政忠友に賜る 按に直政面輪に昭冬二使と行て天と称四教天なる事
京師に到ると云 教八幡人なるべし 詳 通古況に般若院関を原孔像に使僧として
般若院八中京仲在忠一祖なり 二士の回章 二月二日 在り幸沢正成 志ナ寺 の
書 二月十一日 年と就て義別を到る其器云柔猶之枚 近日上洛

せんとて預くハ其云ハ京に至る　二年大意同

慶長六年　辛丑

傳云前中將太納家久乃妻女今年島津相模守忠仍に嫁す忠仍の父六郎義
忠実佐に至て是と正下ふ個業の長相模守忠仍と侵さんとす忠実是を逃て入道に
此女離別して肥後國求ニ入家老相良清藤と同藤次郎章に嫁す清藤故有て二家と仕
かゝ人遂に求ニ入て清藤動せ難に至り石命に出て清藤薩州より相ゝ清藤辛して
郎章に二千石を賜ふ
子孫栄れ考是なり

正月十二日　鍋田出雲守政近を西國に遣し親貞を京師に使たゝ

しむ　按に世諸記國史序文記等の諸書考文慶長六年政近を以て礼謝せしむ時月を記
以編年記是政近と落に至るを按に親貞記慶長六年親貞遊政近京師に
使す　云政近に賜ふ書正月十二日とあ也故に回書に正月十二日の
報書に是を使ふとあるとと云ふ八政近等正月十二日發ちて明年
して回去辛西軍に供ちるの後石田小西安國寺既に極

判に敗し其勢成を射と收ちを國孤深せしを社稷を
保ふるとあるとあ其術法なく勢よ弱なるを恐を故に
龍伯公も亦親ひなる紀ひなるとして社稷乃平紀の為に
身を粧んとすると欲をを政近親貞を京師に出して
を共に真偽を探しむ　按に正月十二日忠恒公親書を作て鍋田出雲守政近に賜ふ其書に云内府公着時の情を以て我を
石ちに速に至て衆と謀せん世の云外と國に敵に敵に御ゝ到ける給ふ遠ふく故に御ゝ是を
親上位をん天下の兵報國に至ん個ふ心を二ふ死を使く亡ん乃く懐ふ私世撮く故家洲
けに滅ひん　政近親貞伏見　時小内府公伏見に着ふ　小西行　龍伯公に命を
ふとと云ふ
述て曰惟彰張て賊小黨を思ふを撮を思ふを以て是國乃京
に到ふるとあるとあるとして數塞をる紀ふを懐る直友等

内府公に告げ新納藤原友久相久書を薩州に遣わせて

三月十日 藤原相久と共に京に到て薩州より帰り井伊直政

三月七日 惟新公忠恒公に賜る 忠恒公に書の事書く添し送ると云へり

龍伯公早くと云へり

お為上野攻正統 十月一日惟新公に賜る書器云 龍伯公

忠恒公に書の事書く添し送ると云へり

龍伯公 忠恒公小鶴丸に所縁を輸

筆書と

第一稿にして二公の 内府公小鶴丸に礼謝をんとて

告げ近衛殿輔公も亦川上久家久勝久智 久智近衛殿に仕へ

帰り書と賜て 内府公の赤心と告げ 京に出川

八月二十日 お為正伝山口直友折紙書と 龍伯公 忠恒に賜る

此書云龍伯田代殿汗身命儀義汗殿有同師事中国之儀者第日聖門伝来相違作法

有同教事兵庫頭殿作事右之汗故不作入湯之上者会相違仏法敵成可申事一云云

お為 龍伯公義と為さる内府公小鶴丸に賜て罪と謝をんとて

筆書伏忠義として先人伏見に到り正伝直友公を書と

誘引して使と為して是と直友小告げ 按に忠友十二月十日回書と

龍伯 惟新公 忠恒公に献して

伏 龍伯公れと汗と勧む

慶長七年壬寅

正月 筆書伏忠義伝先人に到り直政 按に直政今年二月朔日卒す 正伝

見西二士忠義と卒ひ 家康公に謁び鷹と馬と忠義

小汗と

四月十一日 家康公折紙書と 龍伯公小鶴丸て四対国扶

の如なりかの一ヶ條脱よ議と結て國にとゝまり交りを
龍仙公今ハ何を怒と　惟新公小宮ゐ（ゐんや　四月十二日の書　今按ずるに
忠長さい書を賜ひ家臣番仰太郎兵衛小兵衛しめ已に出ん
とす　月て國に帰を　按に五月朔日寺沢志摩守正成　忠恒公に賜る書云　内府公の
書義竊に考るに　内府公六月初旬に至て我を八月に
至まて委に至て　龍仙公に渡し　龍仙公に渡し
動る　龍仙公折紙書と見へ大小拾ひ来ふ　家康公に渡し
賜と辭をんと欲をとの事も　暫久しく二なをとを荷と
背とく成とをよ老臣伊集院下野守久治入道拵を法名高
紀伊守國兵衛四出を為政道を久大炊久正伊勢岳郎兵衛

奥品等　惟新公に渡を　公曰報　龍仙公代ゝ此ものとをれ
ゐ脱に罪と渡て上を報を此仙をゐ　忠恒法ん事可ゐ
龍仙公を不芒に諾を　小御加賀守比奏紀伊守伊勢岳郎兵衛兵部大輔
教振三年御　二原治右馬高清　弥六兵に渡ふ
八月朔日　忠恒公鹿府を発ゝ日州野尾小を て逗留ゝ
報長伊集院源次郎忠真と談を　家久公傳に伝ゐ　細屋庫ゐ
縋と解ゝ十月十日　摂州兵庫小到ゐ　神福寺を宿を定
正則を実を表の忠義小依て安藝備後　四十九万八千石　小　封せゐを
神尾別清次の嫡子　神て國を入ゐ　義に者て　正則大ゐ怒て四者を棄
今の国ゐゐ者公行や安芸者の社ゐ義渡引して

枝村をんを以大坂に到り 忠恒公板倉次郎左衛門を以伏見に
差て先を発く 家康公小笠原東に発く（十月二日 使人を奏す）山口
直友伏見に在り書を 忠恒公に贈て曰（十月十九日の書） 家康公
今多彼伏見に在りんを所と為て渇せよ 我既に使と
為て 公の来るを待く 依て大坂に進ぜん 正則と亦
爰に在て 家康公と対し 正則使を遣て告て曰く
忠恒公も亦来て家友（用人）と共に到て伏見に行むかん
正信回章を正則に駅く曰（十月二日の書） 急帰て為に使大坂
に到るを待て其信の到るを感を 内府公の伏見に到る

とさ小竹を去来 福田世安を留て 暫書を忠恒小太夫
既小交を奪を故小書を直友正純に授して大坂に発 萬
藤家を為りて公 我為に為て小将 天小之 正則に告て
忠恒公に示す
十月（二十六日） 内府公伏見を出 十二月（二十五日） 伏見城小入る
忠恒公と共を紙之正則と共に大坂に発 伏見に到り
正則乃即小宿 少し正純来て共に城に登て
内府公に謁す（二十八日） 正則為に引童を 内府公語ることを
玉鉾を共に共を対を鷹 馬（二十七日）と駅小共に正則小酒に帰り

忠恒公八代目ニ在テ公ニ仕フ　傳云山口直友郎書　惟新ニ賜テ
内府公の御ゝと書く其心を安ずしむ
白樫村ヨリ起キ霧ニ大坂ニ至リ南無ニ揮テ薩別
山川港ヨリ乘リ　忠恒公ニ告テ居ヲ乞ヒ　公情テ鹿別
牛根ニ居ラシム　秀家深愛シテ成元ト号シ又休後ト
改ム家臣等尊敬シ休後洲ヲ日向ヲ経テ琉球国
朝貢ヲ奏シテ礼ヲ厚クス　永ク
薩別ニ居キシム　後ニ秀家ト薩摩ニ移ル　秀家
ニ嫁シテ休後ト称ス　休後ハ琉球国

（備考）
大風ヨリ破ラレ帰ラ自落命ト感シテ止ム於是
忠恒公山口直友ニ命ジ教ヲ告シ教ヲ直友ハ正信ヨリ授ク
テ用ヒ公ニ告ル

慶長八年癸卯

正月　忠恒公順ヲ率テ帰国シ上ヲ指テ無恙ヲ祈リ
日直友和久善之丞ト薩別ニ居シテ浜田秀家連ニ代
見ニ到リ和久正信小関ヲ羅ヲ遣ハシ種子島ニ
赴ク　忠注　或云太郎左衛門忠増也忠増ハ神祇忠敬の次男ニ其子忠保其子外記重　光久公の女ニ妻ス其子仁右衛門久陳其子忠左衛門久
付久陳の次ヲ法嗣ト為ス　光久の妻方ニ入ル　なり　敬公備ヲ
為ス　正真寄文之和尚相系

八月 二十七日 伏見に到り父豊後に告げ叶小西伝図乗に於り故に正統を用ゆ家康公田秀家石田西国事を用ゆ若霊寺より罷出を考へ[illegible]嘆 津氏の江上事と得て謀別久紙を重ね忠興文之国に帰ゆ豊と告ぐ 忠恒公兵入指揮書数を使して豊と謝て後小秀家公丈爲に流す 侍之秀家薩別と出る日謝て田忠恒公再造の恩謝する 因なし 我臣山田半助王川伊藤番局有り豊と告て君に仕へん真番に 従て厳に仕せよ 伊藤陸 郷氏祐久侍 家久公乃侍に仕る

十月 右馬頭紙久入道宗怒用別法を取を添へ神中書 太輔豊久 家康公に歌して死を告げ法を 豊久居城除

せらる山口豊後命と清市庄国を定て仕て法を京城を取り豊久の士七百を籠入城 豊久の子忠恒事代 及び法有り 福り発る 家康公豊久異心なきと聞き法を 忠恒公親戚の人小平[illegible]む故に京都を撰小高見法を京と宗恕に賜ひ結成して今に到る 事は貴久公永禄四年に詳なり

慶長十年乙巳

八月 惟新公の妻安貴[illegible]て江戸に新く神 家康公命 [illegible]て貴と求む 忠恒公侍[illegible]品を[illegible]て島津豊後 久賀 侍衆 に出り 小笠原田沙弥と称して 惟新公のごとくして

江戸小納言となる 按に久賀典義弘公長女 久賀命と書く 母は長女 久賀 第三の

孫今年十三 鹿児島に帰て 六月 十九日 江に到る 数多治世別掛川侯

松平隠岐守宣行上聞を一冊と申て河内守定頼孫久

隠岐隠岐守と称し五世の孫今の松平隠岐守定喬主是也

十二年 丁未

多く 惟新公帰国と云て 加治木に移る 按に逝去し給ふ元和八年九月四日 加治木と 家久公

乃次子兵庫頭忠朗に賜ひ十三年 義弘公に仕る 忠朗の子 悉く忠朗に仕て居たりしむ

十四年 己酉

琉球国尚寧王貢を絶ひ 按山久高西田嘴宗に命じて琉

を征せ尚寧降る 将軍秀忠公感書と 惟新公に

賜ふ 事は家久公の指図に拠る 公又使を以て 馬一疋 太刀一振 紙子十巻 と秀忠公に

献じて琉球と 家久公小姓 ふると謝して 秀忠公亦書と

賜ひて是を謝ス

十九年 甲寅

豊臣秀頼大坂に叛て 武井惟之 義別 ふ出て

家久公と拒く 織田侍従長益入道 伝安の子 書と

惟新公に贈て 家久公ともに秀頼に与せしむ 惟新公

陸奥に武井と縛て 将軍に献ス

元和五年 己未

芳 惟新公病府ゟ ゟ 将軍秀忠公薬湯を

奮と蘆別より参り て見と 治療頻かく七月廿

一日 隅別 加治木に薨じ 享年八拾四 法名 小侍 入て和歌を賦す

玄秋の老も紅葉とゝ ゟ ゟ に人もむすび置 ゟ ゟ

玄齢 自天 庵 ゟ ゟ 福昌寺小藤 ゟ 神 ゟ 新像と 細蓮院

妙安寺 法和山妙安寺明徳元年建立同山石屋 加治木 ゟ 竹 ゟ 寺 杉川山竹寺霊龍島院と号 法華宗京都知恩院末寺 寛長二年

建立同山運巻と人神鏡房国善道寺に住し龍遠寺浄伝滅亡の時肥後国八代庄厳寺に来る

新納旅庵未備ゟて此に住を書と共て蘆別に住し運巻蘆別に来り 泊の法光

寺今宗ゟ小住を聖三年 優婆塞 に 新納 ゟ 嚴宗連ゟ家に於て 義弘公に 肥後国光明寺に

住せしむ 秀吉 西の日優蘆別に来り 石動 光院辺に住し 慶長年 伯耆に至て 義弘公に

助ゟ て 帰依 頼 成寺 立 川 慶長元年 小 祠 ゟ 弼死者十二人 石 帽 新納

石動 ゟ 光院に住し 聖三年 本 竹 寺と 立 川

武神大明久治 父忠朝 八 龍 仰 に 弼死を 故に 幸 俸六十表 今に至て 帰ゟ 新納 号 帝 嘉

祖父 八月廿三日 大宗院 河原に自殺に 事及 新納 伝 加 寺に書と

帰ゟて 演し 如 琴 ゟ ゟ 寺に ゟ 後の世 ゟ て 住 ゟ ゟ

洗の ゟ 序の 記 ゟ に 西 ゟ ゟ て ゟ

祐秀 俗云 祐秀 朝 新 図 書 松 時 備 を 家 ゟ 海 に 論 惟 新 公 是 と 幸 ゟ 世 藤 に

松 ゟ し ゟ 薬 と 湯 ゟ 是 と 感 し て 弼死を 幼 に 油 ゟ 久 能 と 云 文 刑 部 左 寺 ゟ 肥後

巻の山に 戦死 ゟ 是 三 寺 ゟ ゟ 父に 先 川 三 山に

戦死に父子三人悉死 ゟ 孫 本 編 伊 ゟ

なり子孫 薩 生に

住して次 ゟ 寺 と 云

惟 東 共 右 寺 ゟ 山 ゟ 薩 後 薬 ゟ 湯 折 図 和 泉 ゟ 桐

野 治 部 右 寺 ゟ 薩 井 佛 知 志 布 志の士なり 其 ゟ 佛 ゟ 寺 ゟ 帰 ゟ 寺 の士となり

枝 次 宗 寺 協 元 百 右 寺 物 史 桐 辛 寺 是 なり 小 河 家 公 ゟ

伏 見に立て 計 高 と ゟ ゟ 大 ゟ 驚 嘆 し 暇 と 乞 て 国に 帰 ゟ 斉

秀忠公花房四郎右衛門を羅列ふ者

十一月六日出水に入関中
川庫見番に到る

目眼千牧と歸ふ

謹按　義弘公英雄剛毅精を研さ志を深くし
思と彼国銃と称る水煙と攻て相敵鋒を法を示紙
成て作業走る豊後と付て大友敗走ひ出て
九州命に従ふ威名と輝耀る震ひ富武を賞て東
に著を来人恐ふ懐さ

松浦宗祝の孫寿と辛て羅列に来り
遠に懐に
抱きて
道案内を試鐵を避きて投降する者ひ
朝鮮の虜帳と称て
猶我国に出て

旋旗の
指ず意くに
来ん事と欲ふ切名乃ち
奉て事史小家る

抱に文祝廣安の書切名と記する抱らなく武伯
忠皇壊録朝史に出まて是を載て後世に伝ふ

四月の恩を示舟車北る所豊恩こ

西藩野史巻之十四

家久公上

義弘公中之子 第一鶴寿丸永禄二年日刑真幸院加久藤に生る天正元年
丙子十月二十二日八歳にして薩州に赴き加久藤城に蔵る謹
して京山幼生と号し神主を仮野幼生寺に
走り第二久保公院に　義弘公の侍に詳らか
称し　実は島田清左衛門女慶長十二年二月朔日辛巳寶窓芳眞大姉と謚し神主
とす彫刻大院に走り侍云不断光院本堂の阿弥陀佛像の其像なり故に佛殿の
内に流書かり云宰相の母、明石と称す薩田氏なり妾也明石と慶長末に嫁し故に宰相を
亦歴代氏のごとく宰相の方と慶長古記なり称し　義弘公福と賜ふ其子長二所早世
してなし　薩州相模守久信の三男と慶長氏の嗣なり　次所を傷

天正四年丙子

久眞と称し子孫に至て改て和田と称す和田源右為そうう

十一月七日日刑真幸院加久藤城に生る初字茅菊丸元服
して又新忠恒と称し文禄二年朝鮮國に渡り切りう

国立公文書館
National Archives of Japan

義弘公侍に詳らか

慶長三年帰朝し賞をとりて忠恒女婿

銀任し伏見に在て奉仕し

慶長四年三月

任集院右衛門尉忠棟入道幸侃報を承る

任集院右衛門尉忠棟入道幸侃報を承る 任集院右衛門尉忠棟は薩州の人大和守信久其子忠助忠公其子大和守忠親を除髪して孤舟と號し貴久公に仕て老中に任し國家の治に切なり其子大和守忠希信に奚島と號し亦老中に任し其子右馬之丞忠棟是也父に継て老中たり

幸侃性凶険文弓を以て能人を所順し軍に行

是恭して人を恢し信を秀吉入寇の日貴を以て聯業更

濃を秀吉の営に在り諸悉帰伏して義を秀吉在

り其逝るを聞て威を振て踏躍し勢潮し国中皆

傾く神秀吉小係を伐の時又小所久保之長に従て

相別れ幸侃子源次郎忠真亦久保に従て

父の勢に籍て衣服清秀吉の営に

分る所に異む 久保公大に怒て秀吉の営に赴

け公の力を賴む忠真肯て公怒て海西忠真

を得て力を戮て陪従を忠真熟思に嬉

愚て表に出て我父子勝ず天下の為に名を初て世

公乃如中を尚ることや 按に義弘公妻女於下と称し忠真に嫁し女子七歳未家世と云ふ是に紛れ故に云ふ

元亨に準を色しし稠人の中に出て得を得て世に届く

父に告く幸侃亦憤怒して之を殺害の支族として
之世要路當る（三世相傳て國老に任ず）患となして松浦秀吉
小親昵し天下を牧伯と為し龍と等し沙摩を事る事
奴隷のごとし亦く船を命じ島を切窃に為す為我
既小秀吉乃龍異を得且高麗乃諸侯を使と為す
世子孫なり吾今渤海間流離し用ひ太守乃汨を案
んと亦く渦中を免れし童稚相使して恢と為す
又思しこと大事と為す根を絶つを治し其
中を地の利を以て史日別都城を山河を常に険

潮小岡乃地廣し接を汚を取く接を士民成
拾育して基を立て報讐を行ふ大事を図る
御を北條氏を以て都城と為る民將軍に為る二百
餘年九州を以て我もの如く得る能之
之別の經度を以て財を政源と為し
紀城と為んと竊に秀吉を訴（財を訴ふ事八義久文禄二年の條に在り）遂小紀城を財を以て
浦大清四人（合分紛）と成を（神幸侃鹿屋と成を小郷氏に都城山田安宗所
問し浦戦紀六方石と成に）慶長二年より伏見人小在て（傳云幸侃更に
紀と称て是に任ず）執政

五月のつゆおかし終に右田浩助の補に成りたり
好謀なり〳〵源く喜托庇と称して義元を
古典花を飾に名んて云成赤異謀の企
候士大夫は関心 惟新公北条氏と朝鮮に於
て見聞く大に怒り薩州家に敵を成人なりも
〳〵其帰朝は名んて鎮西国連出の津に来て義元と
逆〳〵（侍云義元軍船の内庸奴数百人来て員載して薩に
到る年を経たりしかども又伯耆の人なりしを云成義元と朝鮮に来る）
と細川殿〳〵道とたすけ〳〵伏見の御屋敷伊 屋曲伝を
後小幸流の報と告く 忠恒公信を成義元成

忠恒公ところ邸に遊〳〵幸流と共に私語して曰く殿下の
志既に義元と諾して幸流いつも殿下に勇〳〵叫極て
未達とたとと行前の所行や幸流曰義既に
満蔵蓄鬱後業と朝を汚さ〳〵ものいつとも忠真と
〳〵一たび登庸せらるゝと得る義當法を報に
敢為〳〵成田女将若とせるもんの幸流曰義
もに格毒とたもん法話到と移〳〵て去る 忠恒公大に
驚き成成は術〳〵て帰る
三月九日 忠恒公義幸流と謀を神 公伏見邸中奏事

と称して幸侃と云へる人を召し具して茶と称する出家
幸侃に寄せ〳〵命を授け給へる
侍云幸侃と語りて樹本を論ず幸侃思へる処を新たに刀にして
侍重別所小右衛門と賞さ曰く
侍云小右衛門に仁礼弥人教景と称を仁礼伸
死を
寄せ祖や 刀を法の縁に託し小右衛門に与へて類に已に縁を縁の下に託し 公乃ち徳布
長光なり小右衛門の細工なり八関脇工の作 長一尺三寸今仁礼正脇五家に在り 出縁切り切りと曰へて
長光を
斬しむ 所書院より入書に通じ 内府に及ぶ 内府書状
志摩守に命じ曰く
或云内府の所来て密法刺と称を
吉利支丹の邪教
武邪と云へて幸侃を責る
侍云妻及次を二部
五部千次世に在り
は今して東福寺に
退しむ
接に東福寺八宗所五山の一なり 侍云幸侃の師八忠恒の弟の弟
高に在て邪と曰へり幸侃の居庵多く此に在り其徒と成れりと疑む
妻女
悲嘆して四罪に処せらんと云へり
決せらるんと云へり

再こゝに来て東福寺に到る 寄せ法城に帰る 井伊
長政 捕直政 縛小部 伊勢 長政 捕
奥島出て 内府 内府 内府 幸侃 庵 為
んとす 遂 乃 に 関東北 氏
武 人 義 に 生 変 ふ 昌 望
渝して直政と帰らしむ
侍云前二十人と幸侃を
奉行
石田三成
長束正家
前田玄以 浅野長政 増田長盛 之を奉行
と云 義弘の慶長三年に出川
殿下の命と称して 射 と 告 して 教 遊 な
記すべき 離 に 罪 と 謝 を 伝 る 所

小櫻と　内府公大老（内大臣源川家康公大納言兼征夷大将軍家康公上杉景勝中納言毛利輝元等を五大老と云）
と云　と後して　幸侃信長卿　大羅城　忠恒公　伏見
乃羅城　内府公騎士百人　伊奈肇書　長
帰る　連々　不虞の変に備ふ
幸侃妻　敦城　吉房卿　忠恒公の使を国許へ
伏見　伏見城　卿史　卿城　三月廿日　忠真大河原
心地　時を変ず　敦城に　時に　（或云三月廿六日忠真大河原山に狩し栖鹿頃いかり敦城より一女轎に乗り来り忠真に呼く忠真即帰る後年に今して云一夜の根来星平屋と称して敦城に来る二十九日より敦城と称す）　卿城及び十

二の曲と称さ　敦城の城　東南に大河
あり　西小倉野　西方戦神城　敦城と云
伊集院神右衛門　肥前守　西方恒吉城　敦城と云
五里　伊集院六郎　伊集院六郎　敦城と云
一里半　忠真　小結次伊集院　猫川清兵衛　大姫良
八郎左衛門　守　極小城　敦城と云　一里
濱　伊集院　東の方　鶴山城　敦城と云　一里　野
名護市　野名　名護　冊波谷口伊集院　猫屋城
敦城と云　一里半　伊集院如辰入道　明倉十郎中務　南守

口城 城塁と云 半二里 倉野七郎播磨守紀和方
高城 城塁と云 半二里 北条治式部少輔義春入道清蓮 幸徳院殿
高表左衛門 北条馬久次郎 小笠原清宗左馬頭 志和清城
城塁と云 半二里 伊丹流掃部頭春成入道一忠 蘭丸治右馬頭
野口天台城 城塁と云 半二里 有馬四大夫左馬頭 古道の道後藤
古道兵庫守 西北山四城 城塁と云 半二里 長尚治式部輔長清久喜和
中村兵左馬頭 安永城 城塁と云 半二里 伊集院兵庫頭 伊集院如去
白石和泉中村掃部頭 志真都城に居る 邪蓋流左近衛
源左衛門四郎 高左馬頭 東八郎 清伊集院

前左馬頭 京良 京清八郎 京龍 和泉左馬頭 伊丹左衛門
以下有名の士兵を率ひ志真叛逆乃志俗と称す
とも云の城を造り長成て城と守り不謂志都志と称す
権左馬頭久高 和泉と相原左近将監有道 後に周防守入道と称す 半
長と島津常書 志真 長畑と山田孫九郎有業 後新助氏紀 大輔と称す
高京と入来院又六重時 祇野と伊集院肥前守久春入道
久栄 中京 中右衛門 野尾と 義根 仲兵衛 治津右馬久寛の祖 後肥前守次男と子孫なり 穂
佐と川田大膳亮義明 次郎と 村尾源左馬 入左松清 系図に 矢福と
他の姓に入来院氏五世重勝 長庶子村尾刑部大輔重宗と称す二子なり長と二所を定重と
称す子孫全家に住して村尾市郎右衛門と称す次と俗兵衛守重道と称す 長男 守と称す

次と藏人重成と云其子河内守重春二子あり長と基左馬重尊次と河内重晃光と
称し其子曩守重全其子共五所に重侯後源左馬入道笑栖と称し子孫村尾源左
衛門もや 小林と上野介孫守方人兼 沙新蔵人と云法に 義弘と老中に仕へ
為厨秀秋入道法名 桜に 義弘と老中に仕へ法名よ 父次郎左
武蔵守忠元入道拙斎名軍と褒め無を利して 大炊弘新網
太守公の命と沙門
龍伯公豊日帰く 三月 隔別 薩摩小在人忠真の叛謀
聞なくして山田紙弟守有伝入道理安新網忠
元入道拙斎に命じて庭と云して変を伺へ急と伏見へ
告く 惟新公忠恒公 伏見に在り 小西利右衛門 伊集院に在り 龍伯公に告く
田忠真人とをして叛と云て病小流しそ城と忠真悲て
殺んとを謀り顧小畏伯の内に抱んを恐なく 龍伯公忠真人と面の漏いて忠真決心と弘城と云
して是と設を沈忠島清 戒伊十流 新左馬 田幸侃公の横死を
其罪あるに中なくんを忠と恨しいて忠
忠院と 太守公主の引と摩ふを百に爾て爲乃
漏よ知り罪を謝を小何乃罪をなりけんと石永仙 紀別
根来僧也軍師 と以て幸侃に 田義と智の論国と理小西を為と何人
のかを計る為めて人事を其歌云しけるものと云ふ 都城

天険乃城十二城連綿して首尾相応を数常光地
のとし浮ゆ共精く数を尽るとも成敗を天小存り安
捨く意と思ひんも武不和なり忠真に同
城墨と成し無芸と利し数と化て流と裏む

長谷川 忠恒公 同府公に若く伏見と称す 肥前国彼杵郡 栗毛馬に鞍

小庁同陣中同府栗毛と称 忠恒公に乗り

島津又七郎忠豊 朝鮮より帰国直に
伏見に到り奉仕を 於毛中務太輔 豊久と改む **松倉に左り帰と如て**
伏見と称し **忠恒公** と共に国に帰り伯太東城に入る
時云龍仙公以為車八番なりしに駆り今や忠真及其黨太守公士夫或親戚故舊皆
悉く軍に戦死するものと知らんや因代基卿所之神社に命して士太夫の祈云書と求む

依之三月二日祈云書と書して二人に同く奉る所謂新納拙斧桐敦新右衛長辰
沈忠命国矢孫田敦近要久久忠山田理安新納旅庵平田清宗伯集院掩節横山
久高町田春松樋忠珍北郷
三久上井貴宗各歌不通撰

六月 上旬 **忠恒公帰と鹿児島に到て義弘奉**
と経て東大坊小動東霧島食剛仏寺 東霧島山勅諭院
金剛仏作寺と号し 真言宗也高城の地に在り **と称** 神忠真と無芸と守る
太守公の軍勢を見て道を高津中務太輔豊
久新納拙斧桐村尾松浦長義義流風浮入義流又六
宗府島津右馬次郎久治津下野守久元治津河
内守忠信高津豊後守忠朝治津春四郎川上

源三郎久國作ハ太郎次郎久慶者入根源守忠
政錄田出雲ヲ政近島津源七郎忠直 中務太輔 豊久 子源本藤次郎
右利左衛門類嫡源九郎 種子源九郎左衛門 近江守 田中右郎左
衛門 墨子源次郎 紀伊守 紀伊國奥 子源次郎 佐平治
三原清左衛門 子源三郎 次郎兵衛 町田勝兵衛久幸 上井次郎
左衛門秀秋入道信春 光中 同組頭守 町田源左衛門久及
信集流肥前守久春入道 肝付兼盛 仁礼小右衛門
川上兵部左衛門忠兵 山田源九郎 有紀幸 山田兵部左衛門久重
小御所千代 後陽成守忠紀 稱氏小郷氏十三世 小郷紀左衛門久
仲 上井組頭守敷根 源川田大膳亮

中原中將坊山鹿源助市来小八郎良新右衛門本田兵衛 同長左衛門 同長二郎左衛門 同七助 向坂
長左衛門敷根三郎 敷根三郎 村田刑部太輔 岩切雅樂 源田玄蕃 平田河内守 樋氏紀左衛門 根占七郎
錄田加賀守 源田民部左衛門 佐多六郎左衛門 長田源左衛門 右田源左衛門
長入左衛門 肥後長次郎 新納尾張守 大田左衛門 川上又左衛門 川上十郎左衛門 大島源太郎
高崎源六郎左衛門 右京村田三郎左衛門 栗丸主殿守 相良兵部 解出有馬次左衛門 稚渡新助
本田兵衛 鹿島源左衛門 伊集院助左衛門 是枝原周八野村組馬守 谷山宮内左衛門 東郷
右衛門 右利久左衛門 田長左衛門 伊集院長次郎 野村宮内左衛門 小原左近守 高城源左衛門
稚子源次郎左衛門 有川七郎 四良 善助 押川八左衛門 久保七左衛門 宮原秋右衛門 本田隼人 國分丹後
守 本田出雲守 同兵助 樂源兵左衛門 松浦兵部 市来兵左衛門 大山稲
助 児玉新兵郎 右利左近丹 助左衛門 伊地知兵部 宮原七左衛門 野村
市右衛門 有馬左衛門 入佐助八 野村七左衛門 市来源十左衛門 小島源七 伊地知兵部八 肥後
兵左衛門 伊地知肥守 右田太郎 川敷民部左衛門 平田左右兵衛 鹿島助二郎
伊集長左衛門 大野源三郎 本田長左衛門 伊集院九郎 兵衛八 木丹後守 等名兵之事
市来源左衛門 春田主左衛門 源田兵部左衛門 右利角左衛門等見之後人

一 来て出雲の国方を守る

日州四郡湯那 恭良の子 本良隆 本良隆 人佐 重隆 本良隆 隆房 助

備前長光の刀を賜ふ

重綾（重澄）岐部弥八人を率し来りて忠恒公に帰す 伝云初木浦原
軍の時米良石見入我国の為に米良山中に於て佃東ヶ残兵を撃川大友ヶ日州に退去るの
時太守公の軍に従く 義久公賞して禄五百石を重澄に賜ふ辞して旧徒へ備前長光の
刀を賜ふ（今枚あり） 重澄重信ハ石見守ヶ子なり 忠恒公数功あるを賞して禄五百石を重澄に
賜ふ辞して旧徒へ表して賜ふ徒に衆を信をもて賞ふ重信をもて妻く徒へ志めん 公是を
許し故に来て我邦に臣たり五百石を重信に賜ふ 肥前 青澤志摩守廣高 国唐
其子隼人兵具奉行なり其裔米良小右衛門是也
津の城主 太田（おた）飛騨守 高橋右近 日州縣城主伝云後改易せらる子孫ハ日州に二本松に流浪る神右近 義久公に納ハ献る子と
して臣たらしめん数年二男長右衛門に仕ふ禄千石を賜ふ後七郎右衛門を改む 高橋絶家種
祖也或説云此時忠恒公高橋氏の旧兵を辞せ故に家老左衛門七左衛門軍を率し来り後に我国に
仕ふ禄二百石を賜ふ 秋月長門守種長 日州高鍋城主 薩摩公の命を受て
ひて秀頼に参る 忠恒公軍をとて山田城を攻む 十二月十三日 中務太
輔豊久新納忠元入道拙斎 村尾松清 伝云拙斎ハ島に来て慶前に来る松清ハ讃岐

著せし紙衣布の単衣を着右を祖くふ 先鋒乃将として其前を破め入来院重時ハ
城の後を攻む城兵務貴降を出して陥ず我に年よりて我に功あり
城兵豊久の旗を来て城上に立つ 忠恒公の軍ハ為豊
久なんを登とし先を争て攻入三百余人を斬る 守将長崎
休右衛門及び中村吉右衛門 加番 武藤して城を陥る 忠恒公小山
長代なとして東霧島を守らしめ山田城に移る 按ずるに入国記
青沢廣高 忠恒公の先鋒として山田に移る家老平野 源右衛門萩驅ハ編年記ハ廣高十月来るとあるハ非なり
正に出る 侍若 上様書を斎しめ 十二月十四日 因廣公に告く久正伏兵 忠恒公書入大物久
日 七月十日 忠真十二城乃兵を収め命に出て久正城に廣

接地の淺瀬川の濱源詳なる事を訪ねて云へる田忠真の
兵數幾たくぞの人言て曰ク八千ばかり人今年北條氏
城中に居るや農民を亦城中に居るや久正曰北條氏恒吉
山田を忠恒に屬し其民を城中に居る農を妻子と共
ひて城に入れり 乙又曰根岸氏淺井邦ち城に入るんや言
て曰既に海を渡り川入るものなり お是淀 乙曰淀歸て
告に敵城の利を得たり急に攻め入れん農民を
食と云ふる者や既に忠真の報を貴さん事を
二月に到て報ずる敵城の數さん忠恒仕事

急ふもとしふるも龍伯宮に出て久正拔首して
四軍とを伏せんと出て 七月十 岡小歸と命じ 龍伯宮
懷して四方星ちて中く勝敗と知る良將といふべき
ちんや 島津當書張忠義 申良 攻 横山恒吉久高 高恒 攻
恒吉近將堅る國 松山 攻 恒吉の城を攻む 六月二十二日 守將伺集院
宗右衛 敗く利ありて夜小城小道房 六月二十日 夜也或八月
古日 寺山宗歸右衛久兼 恒吉と曰ふ 傳云市成八東吉堅利なり人日
保川市城と保川又恒吉に移る 恒吉に近く勇智の和いあらんか
市成と保川又恒吉に移る 有國 松山小道房久高志と保川
忠真軍と共に 松山と侵んと謀る 横山久高 恒吉の懷

駿と為て軍を駿に進め、軍を行山に入る敵を屠る、都田志摩守と為て人を遣わし、高橋に至る、志摩守に奔ず、

同府の山田兵衛直友を遣わし、七月九日、縮市石瑞帷子衣百、駿三千或作二千、志摩守に賜う、伯耆国書記官文永命と文書を書して帰て田士卒に示す、

直友又密旨を受け、志摩守に知らしむ、

志摩守、同府の命を恩として謝して、直友を留らしむ、

志摩守の軍、山田の麓に出て、志摩飛騨野に兵を出る、七月十二日、小淵家の軍と出て東霧島に出る、志摩守城

乃敵出て横撃れ、我軍利あらず、東霧島より西に退く、小淵の軍死する者多し、我軍退て二里を隔て、保川敵に臨む、

北郷氏の軍宮嶽に出て、文仲繁の二子を遣わし、敵を長と蛭嶽に伏し、敵を破る、七月廿日、是より軍を文仲に帰す、縮帷小雪と走て入来院市河氏と戦う、

一説に破て霧島と称す、是に於て田尾を経て滝川を渡て水流に出る、市時軍を以て天神山に出て、

小代と金鶴に無勢の市河の軍と戦て敗て来て遠に天

神山の伏をして其後と整川に於て元都田寨小田原
及び其外数と新しく久倉城を築き高瀬より高く城を築き
重時遣りて攻て数十人を斬て回る
八月十三日 小笠原長小松丹後守 共に小笠原長 軍を不分て志
和光城を攻む一方稲荷の尾より厳野吉川を遣て搦
礼地渡りより小一方市河浦右を渡て長谷寺を経て
太郎渡り小谷を敵京より礼小谷を搦手礼の敵より回り戦
搦む又一軍乃至を以て城を保川久遠小松
攻撃る事急なり城兵他に寄せ用示遍る於是天

軍を引て侍云此日小笠軍前と浮る事十三
堅て十二塚と云其塚今に有之

九月十日 志賀左都城を攻れと欲て示滅寺を
軍に小笠原人出て踏て大根田小軍を之久経寺と者して
宮尾田活逸 宮尾村の内 と城て志真軍と寺して事り敗小経
寺遣て志賀志賀遣て小松尾小多と之久の先陣小笠原
為久遠之に他人と寺して志真敗ひの勇と人
都城小帰り時に新和北て天台の軍出て志賀左乃法
軍と戦んと人 志賀左乃法 為久遠豊久安和の軍と破り川
田大膳亮上井仲治故事疏肝半斎安根仲斎飛

吳右北軍と戰ふ相持の間の軍進て寺島川田を
破る上井仲保小右衛門小戰死久興死に數箇所傷を受る死
[illegible]
我軍利勝に乘じ敵猶ふ[illegible]
原に出て榜板を撃て是を破る此志島氏右衛門高城の
軍と率て寺島を救ふ久興死を破る敵川を渡て遁る
小々の軍迫て追て歸る吳右衛門外郭を破る高城
引て移て前八幡城に歸る（傳云九月十三日巷説と
高城を安千代丸に給ふ）
志恒云渡り新城を攻んと欲て
[illegible]十月五日志恒云大軍を率して志和池城を圍て攻む

云城南森田小兵衛其南八幡宮重時小長書院兵部
豊久小路長千代丸小々三人陣を天神尾城に寄る島津
右馬允征久らう幸侯志摩守太田能登守高橋右近
秋月長門守其後小兵衛
直下て白流と義て[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]十月十六日森田小兵衛白流と連義田大郎左衛門塀を攻
小々家の軍川を渡て是と迫て村尾松清毛利兵右衛門止
[illegible]

川原と呼ぶ所に到る秋兵部和井の家小山内川を記す記文
高清水城高城より撃出し見て国境川戦軍死を出す
三百餘人中永中将坊も戦死し備前数と云へり森田乃
軍来り救ひ戦ふ内重十郎和泉守小西と小山内
原小野川此夜村尾松清撃来忠長小西口川東乃
竹林小西伏兵あり高橋宗和加田右の水島乃兵
を引る兵書西湯帰屋川を渡る時を他小西と八幡之
忠長陣中迫て軍と初まる小西の戦を
桃林東の堀家増家多忠法と忠長おて忠長松清を和よ

救ひ帰る村尾右馬蔵（松清の子）毛利勇人右馬等切あり於是
志和池城豊臣敗北
十一月志和池城兵糧尽て敵と葉を噛る小西氏軍
桁川原小西と忠長撃敗を城兵あり敗北 忠長乃軍
進て城中を攻る神谷家の活躍政村の時
立て幸侯より付て二人宮城に在り元長異謀あり
敗北を本常に云 城一手に質と為て人小事に私愛を
云へと懐うんや子孫を将の疑と解て元敗と変ん
と出て力戦して死を 傳三城中十月半即関村半平兄弟の神忠真に近侍を
半平其友京藤清八と潜行て清八瘡痍半平と持

去る半平報ぜんとして半助諫て曰く孰か私怨に死するを忠義なりとせん也者て
君の為に死せよ共に帳を焚て志和地に入る半平年十六容色美なり云の軍中春田善太郎と
と嘗て生死の交りを春田書を懷中に懸て味方に駆り半平と倉せんとす清之兎角
もて竹川死に舎ん旅花半次八平田民弥左衛門と銘を接て死し半平八幡宮を
本田備て退く志和宮内大輔進て半平と敵を拾る隔別百人士平山氏の祖に小川伯耆守
其者と小川半助と云二人あり半助次と田村半平と云半助武勇の志和地城を奪う
水古川上六郎兵衛忠之及数人と結を接し紙人の旨中村九郎兵衛の為に死し半平八和宮に接て
敗し市崖白河通古之汎共用し房用軍汎る半平の戦死と汎る人誤まり

城兵敗走

志和地と図むまり並寄ちう城東大河を城西陣営を
寄り柵を設て十月十六日通路を防ぐ上に楼を下ろす川
路を並ぶ上に長別塚ちう新宮の前寄用塚を築る
於是城中糧を絶き衆を苦む　岩恒乙崇源ふ使せ岩

卒をとる城小者し多銃を放し戦を挑む十月十六日城兵出て是
と進し卒等且敗し且走る荒源を出て伏兵を起し敵敗
十人を斬る敵敗走る北を追し八十余馬帰ふ勝て帰る
十二月八日白石永仙大小太守公の軍を敗る神永仙を紀別
根来の備く蘆別を奪ひ伊集院底源寺に往て聽時ふ
して軍事を用ひて選信して卒統ふ仕へ甚能せる
侍云卒統人を郡の明ちう白石永仙田中清太と浮屠の中に擢こ用高郷結と
賈人柏木根ふ中岩主統地物を高と農民ちう者く挙く者を会ちう　安永城中
小在て策を策と運し軍と分ひ中霧沼山
城清山風名を拾ひ名を拾ふ体を怪卒ひ結ひ人山田城に向人

戰ひを挑む種子島の軍（治庫右馬允信久 種子島の人）二百餘人を出し敵且戰ひ且走る波多山小野の中腹に陣を張り種子島軍援廉こと西郷四郎左衛門尉信久人永仙指揮して敵に向ふ又安永の城中柏竹燻蒸を稚子山のふもとに放つて是を焼く竹燻蒸こゝに掩ふ森田の陣営ふもとに出でゝ以為安永城既に陥ちて危殆を予期して走る老軍（姓名を詳にせず）曰今朝中霧島山中猪を見る所仗兵なるべし遠く進み陣ふ陥ちん危聽を戒めしとぞ（侍云川上軍部彦右衛門忠兄伏見に在て聽と病ひ囲に帰て是を聞き参ふ縁田出雲守政近 忠恒公に告て曰忠兄軍事に到る）

陣中に在て病と養ひ安就て事と誠せん偽之を小家〜忠兄を見て）乙に告て曰陣営霧島の大山に猪多し敵是に伏せるべし以て山を辛り毎に推り丈を山に入〜ゆへ自敵の伏防角〜其後安永の敵来り侵ひ数田忠兄告て進んきゝ〜む今日安永の人と思て富濃の老軍肥後守政曰今日敵と戦しを〜ん〜行きのはる切と猶ん敢に危進て安永に向ふ忠兄人〜として政近に告て曰法に違ふて安永に向ふ人に敵をん其後ひるを〜政近軍と為て我軍に向ふ伯耆負田本田四郎左衛門切ひ

於是 忠恒公軍を進む敗ふ大迫と敵て安永を迫ひ〜波多山風呂谷指ケ谷の伏兵起て其後を遮り城兵出て其前を撃ち我軍戦死して敗る者出る所人〜ふ狼狽し中霧島より〜走る敵急に是を追ふ頼焼泳軍二百餘兵と辛〜大隅戦〜て我軍を援ひ帰る公八神〜り西方松小馬と云〜我軍の敗を見て〜見誤ふ

援んと欲し関人糸田十郎右衛門尉と謂て敵しを乙也と擬て敵しを乙也と打
されも聽し引く懐田小帰り是無に　龍伯公の寵有後
帰くなり　侍云後小龍伯公是と賞して士とし、永仙八首級を斬て都城に
送り忠真石橋して田新十二城と築よ数の無と指麾
し神多の敵と斬るもい〳〵も既小天狗小宵よて切と進
んで実小新し〳〵是と嘆ず　按小永仙此歳に出て四年十二月廿九日隅州肥後人集せる嘗てやく山田
四郎右馬馬詩て是と為る邑人田冥〳〵下馬を下し是数と河小田永仙を墓り〳〵下馬せれし
忽ちに死し故小吉来馬を示て為る者〳〵是を〳〵下馬せれし
新右馬を出んや其墓に屏して為る神〳〵下馬を為る
山田氏の家所松長如者之出し後して神石を為て大の黄金を文小て為る
き元儀四忠真糧を橋よ蔵中寵小水上り流を

城無是と擬て仇と謂く忠真小為其藻と謂て為り又小
もり為る我軍綱と形と法て是と集し城無小示て
識弟を
慶長五年庚子
春正月四日忠真糧を志和地城を網し小と藻小伊集院
新右馬を二日風人と率し擬と後軍に擬し小夜小示し
寵小柵と破り上村主馬の将を森田の軍出て
戦り切と擬し新右馬を大小破き擬と捨て城中に退き
入る　侍云新右馬後に右馬氏伯久に事し後右馬氏に擬る孫なり

城無是と嘆ず出て是と嘆く城中に退き
嘆ず出て是と嘆く

城と称して死をんとす文史乃志郎ありと云ふ糧尽き兵
卒飢乏と量とし出て戦ふ使小因房守こんの
宣儀死をんとすと雖と思ふ所の命と接をんは義と
城と出て降る　二月六日
二月十日　岩怒乙高城を攻んと欲宮出て軍一書を離し
む城兵窮出て田原に戦ふ　小笠原の軍　利あらずして退く
と雖ども城落城の一つ加に到る城兵出て接戦を軍と称し
肥前乙後守山口新兵衛尉直友と謀別よりて肥前　二月十四日　岩真
の羅と称し十と餐ふの城と雖ども能化岩怒を敬をんい

更に岩真と城海岡川中南に対をん　二云後る命と奉し
能国の間より切て先と射をん直友弟くを二云乃折書を
て岩真より来に城とりくしをんお先折書と岩友
小兵ふ　二月六日の書く其器に肥国岩真寺摩守に別て石原の書と呈をん
其罪至て重しと云ふ　肥前乙の命を忘に背き故小罪と問をんして後罪乃
らハ先と
ん　直友先と岩真に示ふ来に落く罪と謝ふむ岩
真ハ乙城　出雲和　岩怒吉　脱小漏と又湖より猿之と憂ふ命とかて
大小欲ひ落とをひ諸城より命して来に降ふむ　按小編年記
初岩真岩友
ら命に背く和睦せ肥前乙怒て岩真ら母友弟と捕て殺をんと欲ふ　岩真等驚て急と
岩真に告て降ふむ岩怒に幸侃伏謀の時京師来福寺に逃る今按此在ると或説に岩
真報て都城と築くむと云ふ罪なり云年十月二十四日　惟影云
伏見に在て岩怒乙に勝ら書乙涼二郎母移く中下ひと云く先と云ふ此見ふ京師に

在事と傳云源二郎の母八吉利下総守忠張の姉なり故に忠真と共於是梶山城を
忠張と見まゝ婚懐して云忠張並びて孫類と辞しく
山之口 三城二月二十九日降る 豊久二人是と取れ 高城 二月朔日降る亦豊久公の母の桜に久国記高
城猶を妻子と奥して敵城に遁る豊久元
として是と恐しむ或云今日八日五日也豊久其故と問答して
不利の日なり豊久曰五日なるに敵を敵とせとて利をひきて 安永野 夫
国二百降る平田城ふ二原 吉利豊 梅山 同十日降る
重経相良長辰等是前 赤坂 同九日降る 川田大隅亮等是と取る 入来院重時
村尾松 賊城 同十日降る 薩摩の
清右 二原重経敗る

都城と出て薩田小路に到り 龍伯 直友来る同 忠恒公に謁を
二公に別れ城に入る 傳云二公篤に示て城に入る其次長千代丸野馬竹に金泥の鎧冑
と薩摩の馬印持しむ其次忠恒公国史平田清宗蛇の目の弁と
立て其次豊久中尾に乗り 忠真 と薩摩 別 頴娃 小稲 敵城 と豊久
都城に入ると云
代を小鶴 傳云高城安永勝吉山之口梶
山梅山と加へ四万千石と鶴

二公都城 十八 出る

凱旋と山時 国府公忠恒小立て書と 惟新公に帰く
是と賀す 惟新公代見に来る 後小根二万石と忠真に 隅別 帖佐
小稜 惟依 崇源院 住吉文高麗に移る 安 小稜次千次 二郎五郎 と 阿蘇 と 居しむ
傳云忠棟多年薩に肥後国に至り加藤主計頭清正に教て城を敵んと欲清正不能空く
帰る故に関ヶ原の乱の後清正肥後国守と 小西行長成 と成 薩別 を侵さんとする故に故に帰る

慶長七年壬寅

忠恒公上洛 小稲 公て是小稲 先是本行国に居る所謂大龍寺
行国に寺と建り 大中公 龍伯公二世是に居る所謂大龍寺 屋敷是也 城地 協元に居る本
福寺の末寺なり傳云類川之城地と下して云吉利の 瑞雲山大龍寺 と云る 流家宗京師来
りし也 公是に後て堂と山上に造り今に在り 天符山 天符堂と造て是と 祈
家久公薩摩下総守常久に命して田山に移て敬云 天災 天災 祈の名なり又云慶長十五年
餞十本弓十張 鉄砲十挺 鶴 折六合樽一荷と
常久妻に鶴 同十九年五月常久山上に卒と云

秋八月 [illegible] 日 忠恒公鹿児島を発して伏見に帰り先君
惟新公石田治部少輔と謀り秀頼の命と矯て無義に
共に濃州関ヶ原に戰ひ利あらずして国に帰る 同大老
家康公乃近臣井伊兵部少輔直政を使として伝命
曰上洛及正純山口駿河守を遣わし薩摩侯人質
如水斉次志摩守庸高ホ仮と称せ書を投ず 龍伯公
来る 惟新公の罪を謝せんことを勧む又 家康公折紙書
と示す 龍伯公時疾痛有り代て 忠恒公伏見ホ都
事ハ義弘公の使に詳ら 忠恒公伊集院忠真と日別野尻に深夜八月十七日先

君忠真に潛ひ加藤清正に因て義報を請る忠真
ら族伊集院忠右衛門 忠恒公ホ忠真を遣て
に庵従せしむ 公野尻に遁て猟を安楽仲兵衛川
田大脇亮村尾松清奉行たり 公川田村尾ホ命して
忠真と偕しむ 二人蕃ホ押川治兵衛 穆伝の士 を殺
しむ忠真ホ朝大津ホ獲て西田新四郎 一説新次郎しん太郎ともいふ 伝ホ
と共ホ帰る 傳云忠真ホ侍臣川井田甚兵衛忠真に潛て田今の街道の付近なく田野
に叢丈ケ人ホ畏む〜〜之ホ求摩に到て客ホ忠真ホ道路に死せんことを
畏に於て生死を変せんに若〜〜飯に及て報ひ
故ホ忠真ホ人馬を用て指ホ忠真ホ常に田馬を乗して

家の帰りに及ぶべく適平田と代り家の器量白馬小家く
失に至る者と思ふ故に助ふく以為忠真の也押川より出る押川
多院と称して平田と警報に川田村尾無と称して忠真と
報じ忠真の侍臣神村新四郎川井田甚蔵て死を押川
自殺して無道と謂へり（按小笠原軍記稿佐人名鳥川治左衛門脇平馬安山右
と交市忠真と警報して曰我警人と警り道て忠真
に中川遂に自殺し法に従と子孫に賜ふ平田新四郎小忠真と為る忠真死を聞
て主従十六人戦て死に是父増家忠真を迎に無を以て紙〻忠真の後
に於り新四郎父の罪に坐て殺せらるゝ小増家も亦誅に伏す
後乙殖妹と称せらるの日増家樣山久高と将を兵権と異様の人小笠原や軍記諸を明り
増家の伏誅数院の戦に新四郎敗を免れ寺に隠り或云是書記忠長国老に伝へ
次序同僚第一たり増家妻て曰我亡世国老に任し切烈誰ゝ我右に有りやんや人の
下に陥れ事無別今一顧に惟新乙忠臣と戦ハ龍伯乙の孫相模守忠仍
之を事なせり我忠仍と善し報忠仍と義事として権を軽んず善と謂と遂に戦逆と謀る及

覚を押川郎家中村治之丞命と交ひ増家全未に新〻二士土湖戸邑を
増家を迎と使て殺を奏て去家戸に警報を此に至て平田氏猫流滅ぶ（押川忠真）

乃ち小姓次を龍伯乙石小忠真一筋の隙より到る様渡新物
阿波神左馬命と交く演市に殺て李中三郎千
次郎を惟新乙に石を庫四郎島原右馬氏証久兵
と谷山（掛橋坂下）より決く決て（此所巷る）信長来孫六九郎清閑当武の
ゆり又と震く戦ふ藤田弥兵と決に忠真の母及祖母（土屋氏）
猶阿波左馬家に安楽左郎右馬来八郎左馬助ありて自殺せ
家と雖て共に死に立て奮戦を統滅て（按に忠真一族ゆり家久を養て子とし後松平源次郎
定行に嫁し忠真の妻ハ惟新乙の孫女なり故下と称し天保十二年七月六を生る今年十
九於下再嫁年下野守久元に嫁し又立郎久近（久元の男）と生む慶安二年八月十七日於下

卒ス虚空蔵菩薩白鹿ニ乗リ給フ福昌寺ニ葬ル神主ト同ノ九種樹流ニ立リ
光久公ノ治世ハ南朝遺臣ト久近ハ賜ヒ更ニ家ヲ樹ントス久近既ニ久元
ノ二男ナリ於下又女子ヲモウケ共ニ始祖トモ云フ故ニ家久ノ次子ノ久世所悉備先芒
文禄ニ年七月廿日十六歳ニシテ卒ス（蘭林純香ト法名ス　栗野浦元寺ニ葬ル）其嗣ハ故久近ヲ以テ其後
ヲ嗣シム久近亦ハ七月又六月ト称スル　光久公年七月又六月ト称スル
久當ヲ以テ後将監ト称ス貞享三年光中ニ任ス享保四年御城代轉任ス　光久公
総貴公　吉貴公　継豊公ノ世ニ歴任シ在職四十年亦ハ　ノ総貴公ノ子十一ノ
子權七久束ヲ養テ子トス先ヲ立テ卒ス故ニ治庫飯布久達ノ弟三ノ子ト養ヒ小平太
久幸ト称ス今ノ小平太久金是也

忠恒公日刑細島庫小纜ヲ解キ十月廿日ニ杉別

大坂小船ヲ以テ十二月廿五日ニ伏見城ヨリ帰ル　家康公ニ謁ス（義弘公ノ條ニ詳シ）

慶長九年甲辰

春正月　忠恒公薩ヲ発シテ国ヨリ帰ル

夏四月　忠恒公伏見城ヨリ帰ル

冬十月　家康公ニ謁ヲ賜ハル

元和元年乙卯　御諸侯ト同ジク御礼ヲ（家康公三月病ヲ江戸ニ出ル四月二十七日駿府ニ帰リ同年八月十六日江戸ニ還ル）

六月

薩奥守小任シ八月国ヨリ帰ル

十年乙巳

寛永三年　忠恒公伏見ヨリ　二月家康公伏見ニ到ル

四月十六日　**秀忠公**（三月二十九日公伏見ニ到ル）**征夷大将軍源氏蒙者**

淳和特学院別当ヨリ補シ（按ニ淳和特学院ハ源氏ノ学問所ニ　此院ノ別当ハ源氏第一高官人任ス）

島津帝ノ時久我雅定ヲ別当ヲ以テ別当ヲ以テ小松帝永徳三年四月十六日

神ヲ将軍足利義満ヲ院ノ別当ヲ以テ武家ノ職任ス

ヨリ勅任ス故ヨリ　忠恒公元和元年ニ　**正二位内大臣**

ニ謁シ（十月朔日）　**是ヲ賀シテ六月ヲ以テ伏見城ヨリ将軍**

忠恒公も亦國に歸る

十一年丙午

五月　前將軍家康公薨する所之　忠恒公も亦伏見に詣て喪職の礼を行ふ

六月十七日　家康公　忠恒公と伏見城に於て諱字を改め

初大業長光作と号す　と賜ふ　お是改て家久と称し号す今

に至る恒例として元服の時世々諱字を改て名とす

按に世系記及新撰諸家系譜等今年九月朝鮮秀忠公に宿して松平氏家の字を賜ふと云ふ

十四年琉球征伐の事を記す書に羽柴陸奥守と云ふ同十九年　公秀頼に送る書に毛利陸奥守

と称し大野治長本多山口の書を並に治長と称し系譜等に元和二年九月朝

松平氏と賜ふと云ふ今年に家の字のことを賜ふと云ふ　明治一世録記等誤まる

十四年己酉

春　家康公琉球國或は中山國或は沖縄島と称す　を征せ初琉球國

を　忠興公將軍に利義教公に謁し後貢物を進

を　慶長吊禮と称す　同國家臣乱を作て國を尚寧に奪

其の物を貢と偽り　且薩川家の創業と称す

家久公使を遣はして命を奉ず出兵

家久公使を遣はして後拒て命を奉ず出兵

家久公　二將軍に告げ軍を新て其罪を伐ん

按に琉球國天孫氏始て此に王たり中山に都し都を首里と号し永万年中鎮西八郎為朝

此に至る國人其勇に畏服し大里按司妹を以て為朝に妻し一子を生む之を舜天と称し為朝日本に帰る

の後数年を共に浦添に居て安堵するに及て勇武文に越せを國人浦添按司を以て天孫

氏二十五世叛逆の為に亡ぶる之を数兵と称して是を以て國中を定め國人之を尊て之を敬

と王となん帝天王と云ふ世を経て王孫王と云天孫氏の後蜂起し或は山南に拠り或は山北に起る国中大乱を又二世にして武寧王に到る攻衰て乱亡を〻山南の尚巴志乱て中山山北を亡し自ら王たり七世にして尚徳王を逐也遂に群下の為に殺せらる国人尚宣威を立て王となん尚宣威とは天孫氏の裔也七世にして尚寧に到る又八世にして尚金の尚王を亡す

琉球傳記云隨煬帝煬殿国の孤虹の海中浮海に似たりとて流虹と名く元の世に至て始て臣服に向て流に乗て求至りと云て流求字を易て琉球と号せり也按に唐桁宋元の文集既に流求字を易て流求字を易て流求と云て流求字を易て明法武帝命して為朝先たりて三百五十年傳記誤まる

横山権左衛門尉久高 国老 と惟[illegible]平田大郎左衛門尉[illegible] 国老 を副

[illegible] 二月十六日 龍伯之惟新之家久之建判の軍令を作て授く 幸田伊勢守親政 供奉 [illegible] 市来伯耆 次第 [illegible]

同名弥[illegible] 用人 有馬次右衛門 重俊 長谷場十郎左衛門 平田民部左

弟 貴 奉行 山鹿孫右衛門 般奉行 和田弥六 頼嬉 [illegible] 伊集院[illegible]

[illegible] 氏 弘毛利 [illegible] 村尾源左衛門 入道 弟 栖 或作 [illegible] 相原周防

乙[illegible]入道 [illegible] 軍 伊集院平左衛門 久元 [illegible] 安房入道 [illegible] 川上掃部士 [illegible] 人 [illegible] 率

[illegible] 千 [illegible] 人 [illegible] 二 [illegible] 人 [illegible] 薩摩川内川津より [illegible] 二月

[illegible] 世系記二月廿六日 押[illegible] 惟新と [illegible] 琉球小[illegible] 惟新之

家久之沖上より [illegible] 龍伯之一[illegible]

して [illegible] を [illegible]

むかふ風ちらぬる梅のかほるかな

久高嬬ふ先大島と [illegible] 為人[illegible] 流[illegible]

[illegible] 島人推き [illegible] 二将軍と進て [illegible] 人屠 [illegible]

指渡し永良部島風俗降り家久公是と賞し岩石
之間を使し遠三十樽を携軍小隊と二將運天港より
和泊具志頭王子（間切名）之司安（官名）浦添按司名護按司
謝名按司備西来院庸命に拝し来り降を乞ふ琉
其志偽いまこと疑り屋しし怪しし是を進て
霸那港より琉球と化し按司を引ち琉軍
是を辛し二將船を巡して池津小湊より港小と民屋を
焼く（月一日）琉軍排戦事二百薩軍勇を奮ひて数
百人を斬り遂小都つ小を前里と囲む数匹尚

寧大小男を城を出て降る（二月廿日）二將是を容き尚寧ことを
司官を率ひ五月（五月廿日）琉球を出て凱旋を（五月二十五日薩州に帰）是是
久高増ふ小屋を紀印を共島采地を使し捷書を
家康公に献を 又將軍より是を於是 家康公
秀忠公書を 龍伯公 惟新公 家久公に賜へ
印を書し琉球国を以て永久 家久公小帰小西
正純も亦奉書を賜へ是を賞し 家久公使を差し
て是を謝し琉球（千斤）唐扇風（絹扇五拾）佛手柑（五拾）
を 家康公小献し（絹五拾）唐扇風（青貝二十五拾）と 秀忠公

田中家蔵

謹〻惟新之又太刀一腰馬一疋縅五十領を献し奉て

恩を謝す

西藩野史巻之十五終

国立公文書館
National Archives of Japan